

光記念館 研究紀要 自然科学

HIKARU MUSEUM

第7号 2012.3

HIKARU MUSEUM



www.h-am.jp

目次

飛驒の御物石器	5
---------------	---

吉朝則富

1,はじめに

2,御物石器の研究史

3,御物石器の定義と呼称

4,飛驒の御物石器解説

5,橋本文献について

6,分布について

7,文様について

8,御物石器の祖形について

9,発掘事例について

10,おわりに

御物石器文献目録

飛驒の御物石器

吉朝則富

日本考古学協会 会員

日本旧石器学会 会員

飛驒考古学会 編集局

1,はじめに

御物石器（ぎょぶつせっき）は、縄文時代における数ある謎の石器群のうち、その不思議さにおいて最たるものであり、形状・用途・起源・分布の偏り等について、今なお解決をみない、いわば「呪術具の王様」とも呼ぶべきものである。

この石器の魅力に引かれ、論考を行った研究者は数多い。「ほぼ定説」とまで評価された論文もあり、その論理的精度には追従を許さぬものがあるが、原点である資料の緻密な観察と、量的な変化において、新たな見解も提示されている点は重要である。

最も必要な事は、個々の実物資料に対する徹底的な観察と、発想の柔軟さであると筆者は考える。この点において、まず個々の資料を正確に提示し資料化する作業が必要とされる。文献探索の過程では、誤記や重複、勝手な解釈も起こりうる。また実物に対しても、疑問のもたれる贋作さえ出現しているのである。

御物石器の分布は極めて局地的であり、特に飛驒地域はその分布の中心域と目されている。従ってまずは飛驒地方の御物石器について、その全てに検討を加え、基礎資料としての精度を高める必要がある。

筆者による御物石器集成の最も新しいものは、2010年、関西縄文文化研究会編『縄文時代の精神文化』資料集に掲載した、岐阜県の集成資料である（文献176）。ここでは、飛驒112点、美濃48点の資料を提示したが、出土遺跡と図のみの集成であり、個々の詳細や採否の意図については、誌面と時間の都合上、解説がかなわなかった。

本稿では、その不備を補うためその1つ1つについて説明を行い、正確な情報による研究の基礎資料を提示するものである。また研究史や、種々の論考を紹介することにより、御物石器の実像にせまり、その謎に挑みたいと考える。



写真1 誕生石 向山ソトワ遺跡



写真2 御物石器の展示 昭和62年 高山市郷土館

2,御物石器の研究史

黎明期～明治まで

およそ西暦 1,800 年頃の文化年間、岐阜県飛驒地方北部の高原郷（現飛驒市神岡町）柏原向山ソトワ地内において、1 個の石器が掘り出された。長さ 1 尺 3 寸 7 分 (41.5cm)、重さ 1 貫目 (3.75kg) もある濃黒色のこの石器は「誕生石」と名付けられ、尼院水月庵に納められて、安産のお守りとして女性の信仰の対象となったと伝えられる（文献 7、写真 1）。記念すべき第 1 号であり、さらに文献の中では形状の偉大さ、石質の緻密さ、彫刻の高雅さにおいて、他に類を見ないと記される。また神田文献では「因に云ふ、婦人懷孕するもの庵に詣り此石を懷き安産を祈るに依ると」と述べられる（文献 3、遺物 No. 52）。

下つて明治 10 年、石川県鳳至郡穴水町比良の法栄寺境内土中より出土した 3 点の石器のうち、完形の 2 点が西本願寺法主の手を経て、北陸巡行中の天皇に献上され、帝室御物となった。長さはそれぞれ 1 尺 1 寸 7 分、1 尺 1 寸八分であった。最初は「石椎」（いしつづい）、「大石槌」などと呼ばれていたが、明治 19 年、『日本太古石器考』にこれを紹介した神田孝平（淡崖）によって「御物（大）石器」と呼称されるようになった（文献 1）。

神田は明治 20 年飛驒を訪れ、佐藤泰郷邸にて水月庵の資料と国府町出土の御物石器 2 点（遺物 No. 15・16）を見学し、学会に報告した（文献 3・4）。この時飛驒で初めて見た「石冠」・「御物石器」・「三頭石斧」の 3 種の石器を飛驒特有の奇品と位置づけ、御物石器と飛驒との強い関連を予測したのである。

古代遺物愛好家であった佐藤泰郷は、時あたかも飛驒一円から発見された考古遺物を自宅に集め、展覧会を開催していた。その膨大な展示品は、実大の図版『千代の鏡』2 冊にまとめられ、物によっては側面・下面・断面図も加えられている。好事家の域を脱し近代考古学への歩みを踏み出した、記念すべきイベントであったといえよう。（参考、石原哲彌「飛驒考古学研究史」（11）佐藤泰郷と「千代の鏡」『どっこいし』39 号 1992）。『千代の鏡』には 6 点の御物石器が含まれる。佐藤は水月庵の御物石器を「異種石槌」、国府町・宮川村（No. 57）・馬瀬村（旧名）（No. 99）から出土したものについては「石枕」と呼称を変えている。形状・石質・製作上の精粗の差などが反映していると思われる（文献 2）。後者はこの他、「山神の枕石」・「天狗の枕石」・「靴石」などと呼ばれることもあった。鞍部の凹みが強く意識されたのであろう。

その後、明治 37 年には大野雲外によって飛驒の 2 点の御物石器（遺物 No. 29・97）が紹介された（文献 5）。さらに明治 45 年には、柴田常恵が小坂町長瀬出土の御物石器（No. 94）について報告し、独鈷石のように柄をつけて槌のように使用したものであろうと、初めて御物石器の機能を推測している（文献 6）。

大正～昭和初期

大正 8 年、飛驒高山の朝戸善友は自家所蔵の 1 点を含む御物石器数点を紹介し、飛驒には多く出土しているが大部分は散逸したと記している（文献 25）。

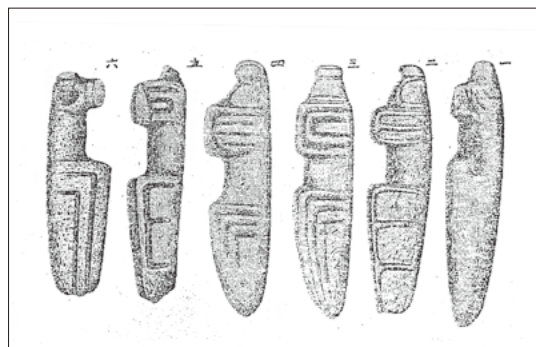
岡村利平も大正 10 年、その著書で御物石器に触れ、枕石と呼称されるが決して枕としたものでない事を強調した（文献 10）。

資料が増加するにつれて、まとまった見解がみられるようになる。大野雲外は石斧形の形式をもつ甲種と、飛驒に多い枕石の形をした乙種に御物石器を分類し、両者が同時代の所産であること、甲種は独鈷石のように着柄し、乙種もやはり利器でマキリの刀を木製の鞘に入れた形と推測した（文献 9）。

これに対し犬塚行蔵は、「石器時代の住民達が殆んど一種の信仰を以て粒々辛苦の結果製作したる高貴なる装飾品と観る事が穩当」と述べている(文献 16)。

これらの見解をもとに昭和 8 年、喜田貞吉は御物石器を弥生時代の有溝ノミ形石器(挟入石斧)に関連づけ、縄文式民族に属する石器時代人が模造・複製を重ねる中で生み出された石器であると考察した(文献 26)。即ち実用品から非常用品という変化の過程で御物石器をとらえたのである(第 1 図)。

なお名称については、「異形石棒」と呼ぶ方がわかりやすいとの中谷治宇二郎の意見もある(文献 18)。



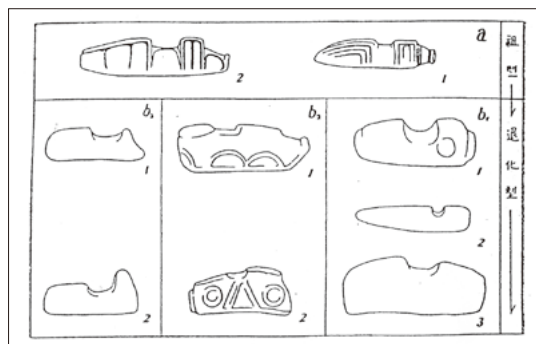
第1図 御物石器(文献26)

このころ飛驒地方では、加藤輝次・江馬修によって御物石器の報告が相次ぎ(文献 29・33・34 他)、昭和 10 年刊行の『飛驒石器時代遺蹟地名表』では 25 遺跡からの「枕石」の出土を記録している(文献 30)。

大正期から岐阜県の石器時代遺跡遺物蒐集に熱心であった林魁一は、御物石器にも特に関心を持ち、美濃・飛驒に分布する資料の報告に努めた(文献 20・23・31 他)。昭和 13 年には『人類学雑誌』にその成果を発表し、35 遺跡 41 個の御物石器を集成、剣刃形精製品と靴形粗製品の a・b2 型式に分類した(文献 37)。そして飛驒及び美濃の山岳部に多いことと、縄文土器及び石器と共に発見されることなどに言及し、実用品と思われることからある場所に安置して宗教的礼拝物か宝物として保存したのであらうと述べている。

この頃日本各地からも御物石器の報告がなされ、滋賀・富山・長野の例が加わった(文献 35・19・28)。いずれも完形の優品であり、富山の中川資料は中屋式土器が伴っていた。

昭和 15 年、吉田富夫は御物石器の型式分類を行い、林の示した a・b の分類に加え a を 2 型式、b を 3 種 7 型式に小別した(第 2 図)。そして可動的な a 類を祖型とし、安定的・固定的な b 類へ退化したと考え、その出自を着装刀剣の模倣と結論づけた(文献 39)。さらに東海地方が西日本文化の進出基地となるのに対して、中部山岳地帯・北陸地方が東日本文化圏の西端を形づくる障壁となって対立しているという指摘を行い、御物石器を東日本文化圏という地域性の中でとらえようとした。



第2図 御物石器の形式変化推定図(文献39)

吉田はその後、用途論に関して「能う限り実用面から考究」すべきことを述べ、民俗例から狩猟具の形態である兎猟の「押し」であると類推した論考を行っている(文献 70)。

昭和20～40年代

戦後はまず藤沢宗平による長野県木曽谷の 3 例が検討され、飛驒・美濃との密接な関係が論じられるとともに、御物石器の突出部を割礼を受けた成人男子の性器と推測した(文献 42)。

その後しばらく停滞状態であったが、昭和 33 年、高堀勝喜の報告により画期的な進展がもたらされた。即ち石川県御経塚遺跡において、円礫に囲まれた特殊遺構より御物石器が検出され、縄文後期か晩期初頭の所産であること、住居の一隅に安置して神を祈ったとするのが妥当な推定であることなどが述

べられるに至ったのである（文献 47. 第 3 図）。

発掘調査の所見に関しては、昭和 58 年に刊行された正式報告書では若干の変更が加えられ、「住居址の一隅に設けられた大小さまざまな河原石 8 個で囲まれた、方形に近い石囲い施設に埋置」され、御経塚Ⅲ式土器が伴出して晩期初頭と位置づけられた。そして飛驒地方を発生地とみなし、北陸への伝播が晩期初頭であるとしている（文献 102）。遺構を伴う御物石器の発掘例として今なお貴重な事例となっている。

飛驒では辻合と大江により新たな資料が加えられた（文献 58・61）。辻合は葬送用の石枕説を否定し、象徴的な崇拝物としている。また大江は岩井田遺跡出土の御物石器を中期末～後期初頭の土器と共出していると述べ、その後の研究に大きな影響を与えている。

昭和 41 年には天羽利夫によりこれまでの集大成がなされた。55 遺跡 68 個体、出土地不明 4 個体あわせて 72 個体を認定し、分布、編年、形態分類、用途、地域性の問題点について論じたものである（文献 63）。分布については、飛驒を中心に益田川・飛驒川流域および神通川流域において顕著であること、近畿・東海地方の平野部が分布領域の末端部であることを指摘した。

天羽の型式分類は、文様を目安に次の様に設定された（第 4 図）。

第 1 型式—三叉状連結文に渦巻文・楕円文・弧状文・E 字状文が組み合わせられる。

第 2 型式—A 類：渦巻文・同心円文が個別に施文される。

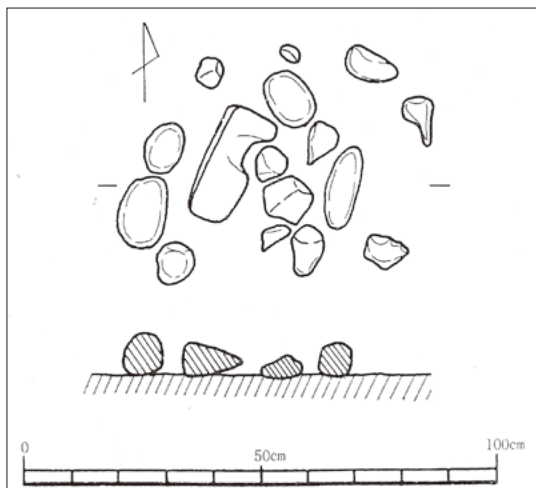
B 類：弧状文・弧線文が単独に描かれる。

C 類：E 字状文・E 字状渦巻文が単独に描かれる。

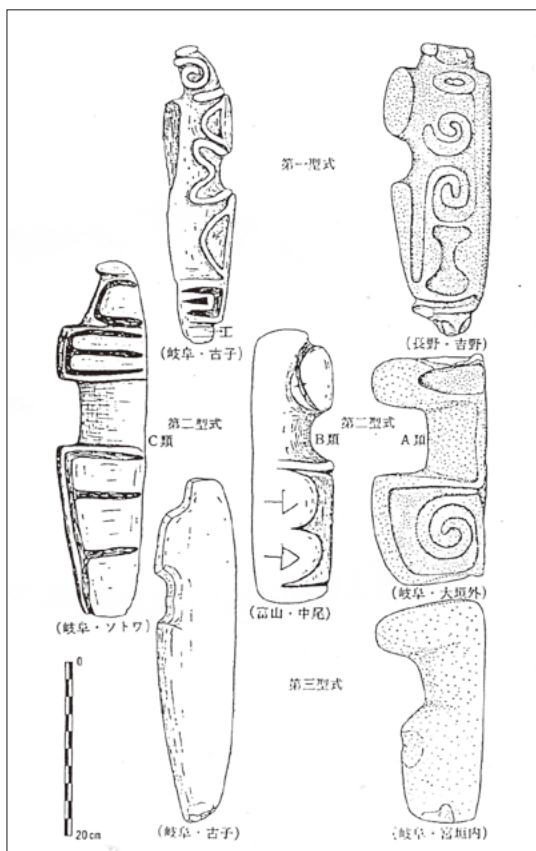
第 3 型式—無文

そしてその変遷は、文様の複雑・複合化から単独・単純化、そして無文化へと系統的にとらえられるとし、土器編年との対比は、第 1 型式を八日市新保式期、第 2 型式は御経塚式期、第 3 型式は中屋式期に対応させた。

形態分類として、研磨製品は黒色粘板岩を多く原材とし細く長大であるのに対し、敲打製品は安山岩、砂岩を用いて巾広く短身であるとした。また御物石器の重要な構成要素が抉り部の存在と突起部の兼備



第3図 御経塚遺跡の御物石器埋置遺構実測図（文献47）



第4図 御物石器の変遷案（文献63）

であるとし、第 1 型式を初源形態と指摘した。さらに断面形にも着目し、三角形状・楕円形状・逆三角形状の 3 者は、いずれも置くことを前提とした機能との関連においてとらえられるとしている。

用途・地域性の問題については、非実用品として安置される性格を強調し、亀ヶ岡文化と突帯文土器文化の二大文化圏が接触する地域の中で、前者の影響のもとで理解される要素が多いことを指摘した。

天羽の研究は、これまでの御物石器研究の中では最もまとまった成果をあげ、特に編年についてはその後の研究者に多大の影響を与えている。

40 年代後半は、分布の外周域の報告例が続く。石川県鶴川、和歌山県丹波、奈良県大森、岡山県西原、新潟県細池、愛知県馬見塚などから新例が報告され（文献 64・74・72・73・80・86）、分布域を広げるとともに、中心域の岐阜県では大和村、白鳥町、美並村から次々と新資料が追加された（文献 78・79・88）。昭和 47 年の『岐阜県史』通史編原始においては、大参義一らにより集成がなされ、美濃・飛驒あわせて 40 の出土遺跡が示されている（文献 71）。また昭和 48 年の四柳嘉章の形式分類は、基本的に天羽の三段階説を踏襲している（文献 76）。

昭和50年代以降

昭和 50 年には、江坂輝彌により御物石器の動物模倣説が提唱される（文献 85）。単なる思いつきと捉える研究者もいるが、根強い支持もある。

昭和 51 年、これまでの御物石器研究に大転換期が訪れる。橋本正による「御物石器論」である（文献 90）。まず天羽の示した文様による分類基準の矛盾と限界を指摘し、新たな分類基準を示した。橋本の認定した資料は 120 個体、うち 89 個体について模式図でもって図示し、検討を加えた。

御物石器の定義として

1. 挟入部をもつこと。
2. 挟入部で大きく 2 つに区切られること。
3. 区切られた一端は体積が小さく肉厚で、残りの一端は体積が大きく肉薄であること。

の 3 点に集約させ、昆虫個体に擬した立場で部位名称を与えた。製作手法として打製→敲打→研磨の 3 手法が加えられ、研磨製品と敲打製品は製作上の相違を示すだけで系統的な差違は持たないとした。そして断面三角形状の群を「濃飛型」御物石器、断面逆三角形状の群を「北陸型」御物石器に 2 大別した。これには分布中心域の名が冠されている。また頭部形態の特徴から「面包頭式」「偏平頭式」「棒状頭式」に 3 分類し、これに瘤・角・尾との関係を加えて計 19 の型式を設定した。

型式の変遷は、挟入部の位置の移行に伴い濃飛型面包頭式から偏平頭式、棒状頭式そして北陸型へと変遷したと考え、Ⅰ～Ⅳ期に整理した。

分布・機能については、石冠と同様局地的に生じた呪術具ととらえ、擦り石・敲き石を原形としてその操作法を残す祭器である石冠の大型化の過程の中で生じた「磨擦器形祭器」と結論づけた。さらに石皿を象徴とする祭祀の存在をも予想した。時期としては後期後葉を起源として、Ⅱ期を八日市新保式期、Ⅲ期を御経塚式期、Ⅳ期は中屋式以降に相当するとしている（第 5 図）。

このように橋本の研究は、御物石器を安置させる性格を有さず、操作してその機能を発揮したものととらえ、天羽により初期形態とされた第 1 型式を最終末期に置くなど、斬新かつ精緻な検討でもって御物石器研究を一段落させたといえよう。

その後の御物石器研究は型式学的追究とともに再び機能・用途論、あるいは分布論がみられるようになる。

鈴木道之助は、石器のもつ属性の1つである文様要素を分類の基礎とした天羽論を批判し、石器本来の形態を中心に型式分類した橋本説を支持、集団儀礼としての宗教具ととらえた(文献96)。

能登健は、橋本の編年観をもっとも正当的な方法によるものと評価した上で、信仰的な器物の多くが具象的なものから抽象化への変化をとげること、即ち簡略化ではなく抽象化の方向で理解されるとし、御物石器における凹み穴の文様から、石冠や石棒に共通する男性原理と女性原理が複合した信仰形態を推察した。いわゆるファリシズムの体系に組み込まれる可能性を示したのである(文献97)。

稲野裕介は、亀ヶ岡文化圏に影響を与えたものとして石刀や石冠・土冠があり、中部地方日本海側から東北地方への文化波及のルートを想定するとともに、受け入れられなかったものに御物石器をあげ、呪物からみた縄文晩期の地域性の問題を論じている(文献114)。

西脇対名夫は、陰刻紋様の精製品を古相とし、浮彫紋様や粗面の石材を使用したものは省略形態であると述べるとともに、寺地遺跡の配石遺構の例(文献116)から、うずくまった猪を思わせる大きな石像がこの石器の起源であったかも知れないと考察している(文献118)。

新しい研究として、増子誠の論文があげられる(文献142)。

増子はまず橋本の技術的検討の不充分さと、年代比定する資料の問題を指摘するとともに、全長・断面形態・挟り部高さを指標とした分類によるA・B群、上部形態による1・2類に分け、さらに細部形態からa～e類の計2群10類の分類案を提示した。また裏面の平面化する現象から、橋本の「使用痕」説を製作技術の差ととらえ、近年の発掘資料を含めた195点の御物石器を対象に編年を試みた。これにより、

I期—上部・挟り部・下部側面に連結三叉文・円文・渦巻文を浮文として施す段階(後期末～晩期初頭)

II期前半—玉抱き三叉文(晩期前葉)

II期後半—E字状文・E字状渦巻文を沈文として施す段階(晩期中葉)

の形態変化がとらえられ、分布のうえではI期・II期前半が美濃・南飛驒を中心に分布するものと、II期後半の北飛驒・北陸を中心に分布するものに分類されるとの研究成果を導き出した(第6図)。橋本の「磨擦器形祭器」論に対する反証の1つとして重要な論考といえよう。

その後は、北飛驒におけるいくつかの発掘事例の増加(文献145、150他)、沢田伊一郎による美濃の御物石器のいくつかに対する再検討(文献157、162、170、171)、筆者による御物石器研究の総括(文献153)及び数編の御物石器新例報告(文献148、173他)等をへて、現在に至っている。

注目されるのは、大分県竹田市田井原遺跡で採集されたという完形の御物石器発見のニュース(平成19年12月11日付中日新聞記事写真3)である。九州では初めての発見であり、岡村道雄は「御物石器をまつる集団が移動した」と述べている(文献172)。あまりにも遠隔の地での初見であり奇異の感は否めないが、真偽を確かめるべく調査の必要性があろう。



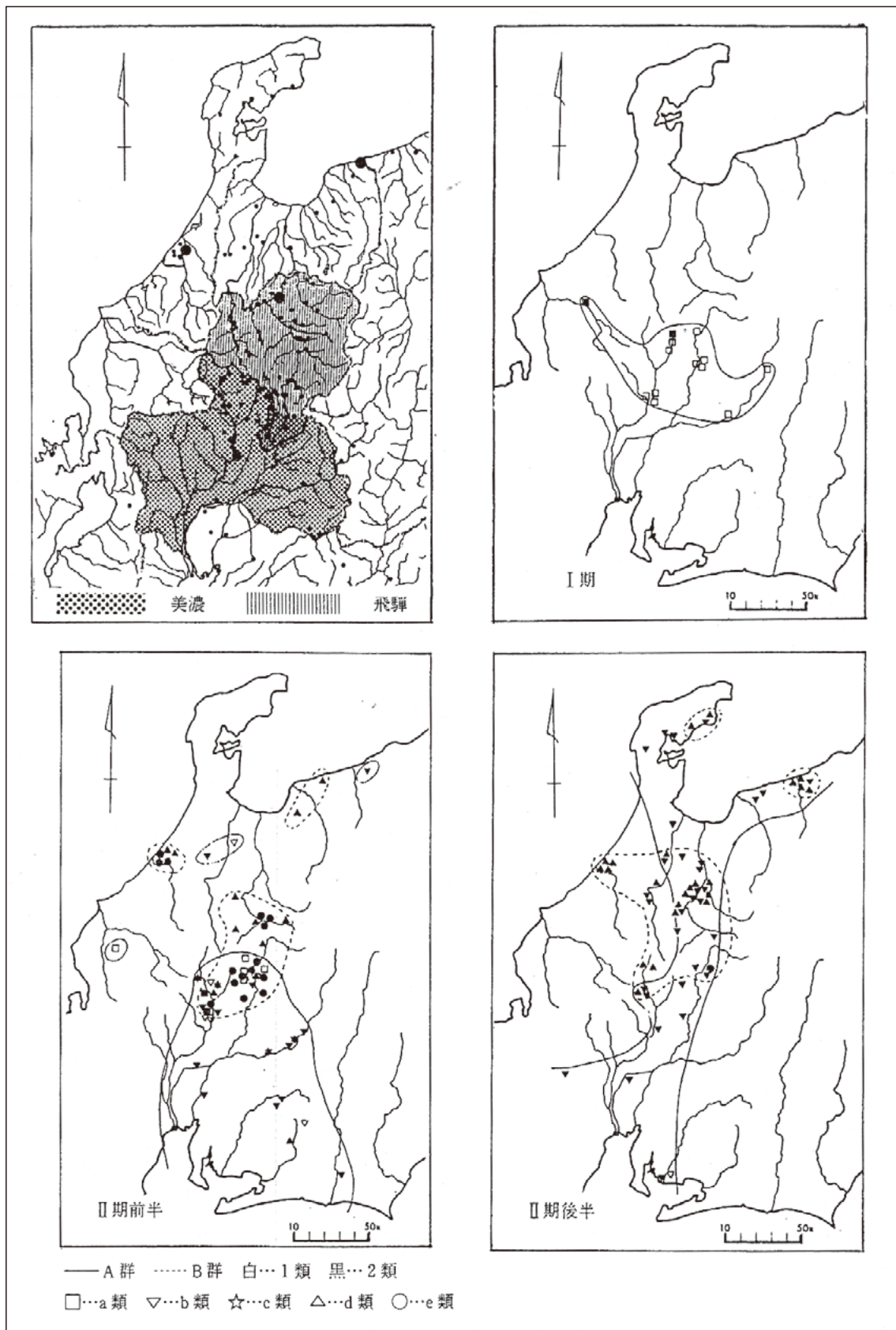
写真3 中日新聞記事

3.御物石器の定義と呼称

御物石器の定義は、橋本の示した3点に集約できる。

時期区分		第 I 期		第 II 期				第 III 期				第 IV 期
土器編年		北陸八日市新保式以前(大洞K式)				八日市新保式(B)		御経塚式(B-C)		中屋式(C ₁)		中屋式以降(C ₂)
区分	文様	面包頭式		偏平頭式		瘤付面 包頭式		棒状頭式				角付棒 状頭式
		1	2	1	2	3(瘤付)	4(瘤付)	1(瘤付)	2	3	4	
濃 飛 型	無文											
	素文											
	浮文											
	浮・沈文											
	沈文											
北 陸 型	浮文											
	沈文											
	無文											
	無文											
区分	文様					偏平頭式		面包頭式	1	2	3	角付面 包頭式
	型式名							瘤付面 包頭式	瘤付面 包頭式			

第5図 橋本による御物石器編年(器高を1とした模式図)(文献90)



第6図 増子による御物石器の分布図各類型の時期別分布 (文献142)

御物石器の部位名称案は過去、天羽・大参・増子らにより示されているが、混乱を避けるため橋本による呼称法を紹介しておく(第7図)。前述した様に御物石器を昆虫個体に擬した立場で命名したものであり、例えば天羽の上部、大参の前部は頭部、天羽の背面、増子の底面は腹面と呼称される。但し天羽の使用した荘川村出土御物石器のサンプル(第8図)は、渦巻文のある部分が実は肉薄で、橋本の規定によれば明らかに下部(腹部)にあたる。恐らく実物を見ていなかった為の間違いであろう。

御物石器の大別は、腹面のあり方でまず決定される。天羽は御物石器の断面形を三角状・楕円形状・逆三角形状の3態に分けたが、断面を頭部に限定すると三角形状と逆三角形状の2者に統括できる。前者は飛驒・美濃地方を中心に分布しており濃飛型、後者は北陸地方にその過半数が存在することから北陸型と呼称する。

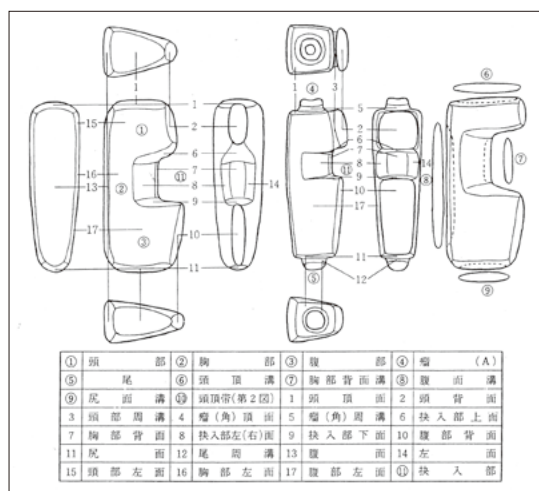
材質的には濃飛型には砂岩・安山岩を原材とし、北陸型は黒色粘板岩・緑色片岩を原材とするものが多い(第2表)。

次に御物石器頭部の形状から3つに中別できる。第1は甲冑の面皮に似た形状をもつもので面包頭式と呼ぶ。第2は頭部に周溝を巡らせ重ね餅状となる偏平頭式、第3は細長く棒状に突出した頭部となる棒状頭式である。棒状頭式は濃飛型のみが存在する。

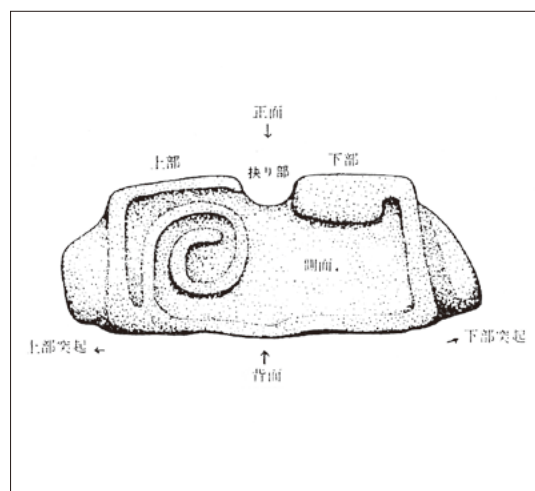
瘤・角・尾が付設されることによりさらに細別され、橋本は計19の型式を認定している(第9図)。

御物石器は、研究者により「ぎょぶつ」「ぎょもつ」「ごもつ」などと呼び方に相違があるが、ここでは「ぎょぶつ」と呼ぶことにする。

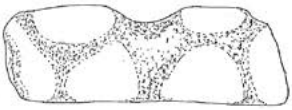
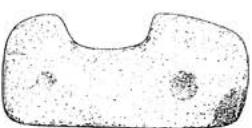
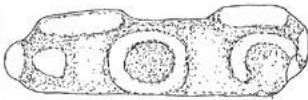
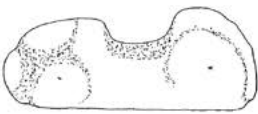
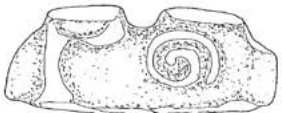
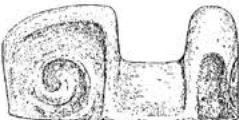
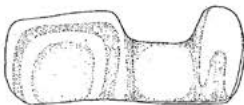
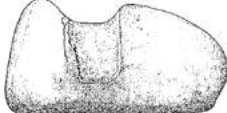
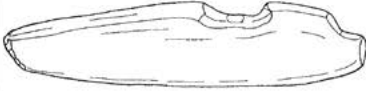
以上の点を勘案した上で、次に飛驒地方の御物石器について、集成と個々の解説を行いたい。集成表の文献は主要なものにとどめ、全文献は文末に示した。解説の番号は集成Noと同一である。地名は旧市町村名で示した場合もある。



第7図 御物石器の呼称 (文献90)



第8図 御物石器各部の名称 (文献63) 実際は右が上部

濃飛型			濃飛型		
			扁平頭式		棒状頭式 角付
濃飛型	1式		濃飛型	1式	
	2式			2式	
	3式			麵包頭式 瘤付	
	4式			偏平頭式	
	5式			麵包頭式	
濃飛型	1式		北陸型	麵包頭式	
	2式			瘤付麵包頭式	
	3式			瘤付麵包頭式	
	4式			麵包頭式 角付	
	棒状頭式 角付				

第9図 橋本による御物石器分類を基にした模式図

第1表 飛驒の御物石器集成表

	遺跡名	所在地	型式	長さ (推定長)	石質	主要文献
1	泉水？	高山市江名子町上野	濃飛型角付棒状頭	28.0	砂岩	41.63.166
2	泉水？	高山市江名子町上野	濃飛型棒状頭？			
3	保木	高山市下江名子町保木	濃飛型棒状頭 2 式	(21.5)	砂岩	30.37.58
4	宮ノ前	高山市江名子町	濃飛型面包頭？			
5	森下	高山市山口町森下				25.30
6	森下	高山市山口町森下				25.30
7	臼元	高山市漆垣内町山腰				30
8	みせの	高山市松ノ木町みせの	濃飛型棒状頭 3 式？			
9	よしま？	高山市上切町よしま	濃飛型面包頭	30.0		
10	日焼	高山市中切町日焼	濃飛型棒状頭 3 式	25.7	砂岩	155.185
11	二反畑	高山市石浦町二反畑	濃飛型面包頭	36.6	流紋岩	
12	下道	高山市国府町上広瀬下道	濃飛型面包頭 1 式	28.7	砂岩	24.37
13	石原	高山市国府町上広瀬石原	濃飛型棒状頭 2 式	(24.5)	流紋岩	168
14	宮地	高山市国府町宮地	濃飛型面包頭	26.7		2
15	荒城神社	高山市国府町宮地宮垣内	濃飛型棒状頭 3 式	22.7		2.51
16	荒城神社	高山市国府町宮地宮垣内	濃飛型棒状頭 3 式	25.7		2.51
17	()	高山市国府町	北陸型面包頭式	26.0		26
18	長倉平	高山市上宝町長倉平	濃飛型棒状頭 3 式	24.8	砂岩	63
19	こうろう	高山市朝日町万石こうろう	濃飛型棒状頭 3 式	(20.4)	安山岩	141
20	宮の腰	高山市朝日町立岩宮の腰				63.90
21	()	高山市久々野町山梨と左工門	濃飛型角付棒状頭			37
22	()	高山市久々野町無数河				184
23	池野	高山市荘川町六蔵池野	濃飛型棒状頭 2 式	25.8	安山岩	46.54
24	芝野	高山市荘川町六蔵芝野				30.37.40.46
25	川原	高山市荘川町三尾河川原				30.37
26	後谷	高山市荘川町野々俣				30.37
27	赤谷	高山市荘川町赤谷北谷	濃飛型面包頭 1 式	23.5	花崗閃緑岩	167
28	赤谷	高山市荘川町赤谷北谷	濃飛型偏平頭 3 式	33.0	流紋岩	
29	()	高山市荘川町	濃飛型偏平頭 5 式	29.5	輝安山岩	5.8.25.37.63
30	堤垣内	高山市丹生川町坊方堤垣内	濃飛型棒状頭 2 式	(22.0)		143
31	柏原	高山市丹生川町柏原				30.54
32	細越長森	高山市丹生川町細越長森	北陸型棒状頭 3 式	21.1	緑色片岩	143
33	桐山広殿	高山市丹生川町桐山広殿	濃飛型面包頭式		凝灰岩	143
34	かくしくれ	高山市丹生川町五味原かくしくれ	濃飛型面包頭 1 式	19.1	流紋岩	53.143
35	塚畑	高山市丹生川町旗鉾塚畑	濃飛型棒状頭 4 式			30.37
36	野首	高山市清見町夏蔵野首	濃飛型棒状頭 3 式			30.37.90
37	和多田	高山市清見町大原和多田	濃飛型面包頭 1 式	25.0	安山岩	71.91
38	()	高山市清見町大原	濃飛型偏平頭 2 式	32.8	砂岩	193
39	二本木	高山市清見町二本木	濃飛型棒状頭 2 式	22.7	火成岩	37.118
40	()	高山市清見町坂下	濃飛型棒状頭 3 式	26.0		5.25.63.90
41	堂ノ下	高山市清見町江黒堂ノ下	濃飛型棒状頭 3 式	23.1	花崗斑岩	91
42	福蔵	飛驒市古川町太江福蔵	濃飛型棒状頭 4 式			92
43	()	飛驒市古川町太江	濃飛型棒状頭 3 式	27.4	凝灰岩	
44	中野山越	飛驒市古川町中野	濃飛型棒状頭 3 式	27.3	流紋岩	
45	沢	飛驒市古川町上気多沢				30
46	岡前	飛驒市古川町岡前	濃飛型棒状頭 2 式	25.7		
47	黒内五ヶ	飛驒市古川町黒内五ヶ	濃飛型棒状頭式	28.9	砂岩	111
48	黒内細野	飛驒市古川町黒内細野	北陸型偏平頭式	34.0	緑色片岩	148
49	黒内細野	飛驒市古川町黒内細野	濃飛型棒状頭 3 式		凝灰岩	148
50	黒内細野	飛驒市古川町黒内細野	濃飛型棒状頭 3 式	21.0		
51	数河宮田	飛驒市古川町数河宮田	濃飛型棒状頭 3 式	23.0		
52	向山	飛驒市神岡町柏原向山	北陸型瘤付面包頭 3 式	41.5	粘板岩	3.5.7.8.16.26.63.66
53	向山	飛驒市神岡町柏原向山				37
54	石神	飛驒市神岡町石神下野	濃飛型面包頭 1 式	29.0	砂岩	63
55	水ヶ平	飛驒市神岡町梨ヶ根水ヶ平	濃飛型面包頭 1 式	26.5	砂岩	149
56	打保	飛驒市宮川町打保入与	北陸型面包頭？	30.3	砂岩	30.34
57	金清神社	飛驒市宮川町塩屋ほそおき	濃飛型棒状頭 3 式	27.0		2
58	金清神社	飛驒市宮川町塩屋	濃飛型角付棒状頭			90.115
59	金清神社	飛驒市宮川町塩屋	濃飛型面包頭		塩屋石	127
60	家ノ下	飛驒市宮川町林家ノ下	濃飛型棒状頭 4 式	31.0	花崗岩	89.145
61	家ノ下	飛驒市宮川町林家ノ下	濃飛型棒状頭 4 式	22.8	石英斑岩	89.145
62	家ノ下	飛驒市宮川町林家ノ下	濃飛型棒状頭 4 式	22.6	閃緑岩	89.145

	遺跡名	所在地	型式	長さ (推定長)	石質	主要文献
63	家ノ下	飛驒市宮川町林家ノ下	濃飛型棒状頭 4 式	21.1	凝灰岩	89.145
64	家ノ下	飛驒市宮川町林家ノ下	濃飛型棒状頭 2 式	21.0	安山岩	89.145.181
65	家ノ下	飛驒市宮川町林家ノ下	濃飛型棒状頭 2 式	(24.0)	流紋岩	145
66	家ノ下	飛驒市宮川町林家ノ下	北陸型面包頭式		粘板岩	145
67	家ノ下	飛驒市宮川町林家ノ下	濃飛型			145
68	家ノ下	飛驒市宮川町林家ノ下	濃飛型			145
69	宮ノ前	飛驒市宮川町西忍宮ノ前	濃飛型棒状頭		安山岩	150
70	宮ノ前	飛驒市宮川町西忍宮ノ前	濃飛型		粘板岩	150
71	宮ノ前	飛驒市宮川町西忍宮ノ前	北陸型?		粘板岩	154
72	宮ノ前	飛驒市宮川町西忍宮ノ前	濃飛型面包頭	(30.0)	流紋岩	154
73	()	飛驒市宮川町三川原	濃飛型角付棒状頭			138.173.182
74	宮ノ上	飛驒市宮川町宮ノ上	濃飛型面包頭 1 式	23.5	凝灰岩	30
75	()	飛驒市宮川町三川原	濃飛型面包頭 1 式	25.7	砂岩	173
76	瑞穂	飛驒市宮川町杉原瑞穂				182
77	荒家ノ下	飛驒市河合町羽根荒家ノ下	濃飛型棒状頭 3 式	(26.0)		121
78	西沼	飛驒市河合町羽根西沼	濃飛型棒状頭 4 式			30.37.90
79	大門寺	飛驒市河合町角川大門寺	濃飛型角付棒状頭		砂岩	37
80	家ノ腰	飛驒市河合町有家家ノ腰	濃飛型面包頭 1 式	29.0		54.63.121
81	家ノ腰	飛驒市河合町天生家ノ腰	濃飛型棒状頭 3 式	(28.0)		121
82	下島	下呂市下呂町乗政下島	北陸型瘤付面包頭式	33.0	緑色片岩	56.96
83	下島	下呂市下呂町乗政下島	濃飛型角付棒状頭		砂岩	29.37.90
84	()	下呂市下呂町乗政第 2	濃飛型偏平頭 2 式	32.8	砂岩	94
85	()	下呂市下呂町乗政第 2	濃飛型偏平頭 1 式	31.1	泥岩	94
86	下垣内	下呂市下呂町久野川下垣内	濃飛型棒状頭 2 式	25.5		54.71.180
87	大畑	下呂市下呂町御殿野大畑	濃飛型棒状頭?			
88	袖垣内	下呂市下呂町森袖垣内	濃飛型棒状頭?			
89	神屋垣内	下呂市萩原町西上田神屋垣内	濃飛型棒状頭 2 式	25.7	砂岩	30.31.37.55
90	桜洞神田	下呂市萩原町桜洞神田	濃飛型瘤付面包頭	27.5	砂岩	17.93
91	桜洞神田	下呂市萩原町桜洞神田	濃飛型棒状頭 3 式			17
92	()	下呂市萩原町桜洞	濃飛型棒状頭 3 式	(24.0)	砂岩	186
93	古子	下呂市小坂町長瀬古子	北陸型瘤付面包頭 1 式	33.6	緑色片岩	61.62
94	古子	下呂市小坂町長瀬古子	北陸型角付面包頭	39.9		6.26
95	大垣内	下呂市小坂町大垣内	濃飛型棒状頭 2 式	25.2	砂岩	61.62.63.96
96	岩井田	下呂市小坂町大島岩井田	濃飛型面包頭 1 式	26.1	凝灰岩	61.90.142
97	橋戸	下呂市小坂町大洞橋戸	濃飛型棒状頭 3 式	26.0		5.10.25.30
98	味屋	下呂市小坂町長瀬味屋				30
99	無笹	下呂市馬瀬町黒石無笹	濃飛型偏平頭 3 式	37.0		2.183
100	無笹	下呂市馬瀬町黒石無笹				
101	上垣内	下呂市馬瀬町中切上垣内				
102	()	下呂市金山町中切平沢	濃飛型偏平頭 3 式			29.37
103	卯野原	下呂市金山町卯野原	濃飛型棒状頭 4 式	35.0		90
104	戸部寺本	下呂市金山町戸部寺本	北陸型瘤付面包頭 3 式	36.3		21.37.84
105	中ガイツ	大野郡白川村平瀬中ガイツ	濃飛型角付棒状頭	29.0	流紋岩	68
106	上通	大野郡白川村稗田上通				30.46
107	下ガイツ	大野郡白川村木谷下ガイツ	濃飛型棒状頭 3 式	26.8	流紋岩	30.33
108	下ガイツ	大野郡白川村木谷下ガイツ	濃飛型面包頭 1 式	27.2	花崗岩	33
109	下ガイツ	大野郡白川村木谷下ガイツ				33
110	島巾通	大野郡白川村島巾通	濃飛型面包頭 1 式	31.2	砂岩	103
111	島巾通	大野郡白川村島巾通	濃飛型面包頭 1 式	14.0	砂岩	103
112	島巾通	大野郡白川村島巾通	濃飛型面包頭 1 式	7.6	砂岩	103
113	()	大野郡白川村内ヶ戸南屋敷				40
114	()	大野郡白川村	濃飛型棒状頭		砂岩	
115	()	飛驒	北陸型瘤付面包頭 3 式	(33.0)	粘板岩	
116	()	飛驒?	北陸型瘤付面包頭 3 式	(40?)		

4,飛驒の御物石器解説

1. 後藤・多賀(文献 41)に「江名子? 砂岩」とあり、現在玄武岩質のレプリカとして下呂湯之島館に保管される。天羽(63)、橋本(90)では泉水と記されるが、吉朝(166)にその経緯が説明される様に、泉水とは断定出来ない。

2. 昭和 50 年代に中学生中谷勝也により採集されたと聞く。頭部破片で十文字の刻文が伴い、本人が所蔵していると思われる。
3. 『飛驒石器時代遺蹟地名表』(30. 以下地名表と表記) に初出し、辻合 (58) で詳細に述べられる。1963 年に谷口家で実見し十字の陽刻のある砂岩製と記している。葬送用の石枕説を否定し、象徴的な崇拝物としている。美術館に売却。
4. 高山市郷土館に収蔵されていたもので、製作過程の未製品と考えられる。
- 5・6 加藤 (25) に初出。大正 8 年の神通寺住職朝戸高山の遺稿を加藤輝次がまとめたもの。赤木 (38) にも、森下遺跡で田中正太郎が 2 点採集し東京へ持ち帰ったとある。
7. 地名表にあるのみで、詳細不明。
8. 縄文時代全期にわたるみせの遺跡において、昭和 51 年頃小島幸男氏が発見したもので略図のみが残る。実物は行方不明。
9. 高山市風土記の丘学習センター蔵。未製品か。
10. 昭和 35 年頃、地主山本徳重氏が自宅庭を掘削中に発見したもの。砂岩製の優品である。上枝村史 (155)、吉朝 (185) 参照。
11. 縄文晩期土器 (御経塚式) の出土している二反畑遺跡において、地主上瀬吉郎氏が発見したもの。未製品あるいは猿石の類と思われる。垣水 (120)。
12. 林 (24) に昭和 6 年、杉山吉三郎宅にて拝見とあり底面に凹みのあるのが特徴である。砂岩製。下広瀬が発見地とされるが、同人の (37) では上広瀬と誤記? され、さらに下広瀬 2 点とも書かれている。橋本 (90) は上広瀬とする。なお多賀 (40) では塔ノ前 (下広瀬に隣接) に 2 点とある。
13. 昭和 60 年 11 月 20 日、田川氏宅にて実見・測図。渦巻文・頭頂溝・背面溝を伴う優品である。流紋岩製。
14. 文献 2 『千代の鏡』に図示される。「第 88 図石枕、出所古城郡国府村宮地組 藤木豊之助氏蔵」と記されている。京都方面へ売却されたという。
- 15・16. 同じく (2) にみられ、「第 89 図、宮地組菅原源助氏蔵」「第 90 図、同」とある。ともに荒城神社に収蔵され、澄田 (51) で詳述されている。
17. 喜田 (26) に国府村発見、高山の人畠太助所蔵、後に小杉博士がもらいうけ、さらに喜田貞吉の所有に帰したとある。東京人類学教室所蔵、との加藤輝次のスケッチも残る。喜田は有溝ノミ形石斧との関連でとらえている。
18. 古川町村坂コレクションとして所蔵される。天羽 (63) に初出。昭和 60 年筆者実見測図。砂岩製。
19. 発掘調査にて出土。平成 5 年実見。報告書 (141) に写真あり。安山岩系。
20. 天羽 (63) に初出するが、地図上に示された位置からして宮腰は高山市山腰の誤りと考えられる。橋本 (90) もそのまま使用している。
21. 林 (37) に稚拙な図で初出し、未製品と考えられている。文献 63・90 にも記載あり所在不明。
22. 土田『飛驒の神社』(184) に、堂の垣内八幡神社宝物中に御物石器ありと記され、探査したが不明であった。
23. 加藤輝次コレクションとして高山市に収蔵される。地名表では芝野・三尾河・野々俣の 3 ヶ所に枕石として出土が記されるが『岐阜県遺跡目録』(54. 以下目録と表記) では池野・三尾河・野々俣に異形石器と記され、『岐阜県史 通史編原始』(71 以下県史と表記) には芝野、池野が併記される。『荘白川総合学術調査報告書』(46. 以下荘白川と表記) に池野は岐阜加藤氏蔵とあるから、本資料は池野出土としてよからう。

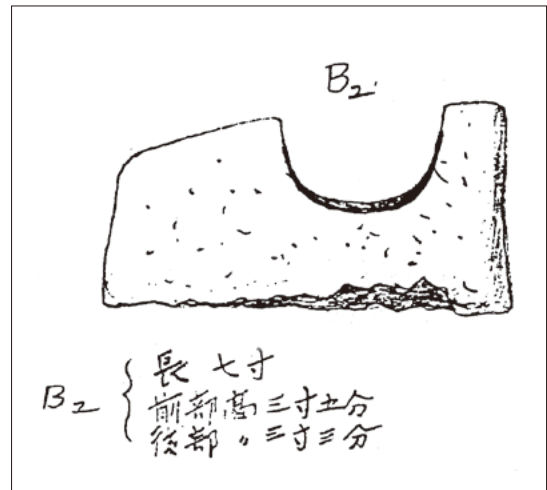
24. 地名表に初出。多賀 (40) に「神通寺蔵、山上にて発見」とあり、林 (37) にある荘川村内出土のNo. 28 資料をこれにあてている。しかし林は発見字名不明としている。
 25. 地名表初出で、林 (37) は「荘川村三尾河にて某氏の所有せし御物石は、荘川村六廐の山上にて拾ひたる者なりしが、現今其の所在不明にして、又同氏は外に 1 個を所有せしも他へ譲り渡したるを以て、発見地に就き疑問を付し置きたり」としている。また「高山市神通寺蔵は 41 個の内に入らず」として 3 ヶ所とは別扱いしている。
 26. 地名表初出で、詳細不明
 27. 平成 19 年に発見された資料で、岩田 (167) に報告がある。花崗閃緑岩製。
 28. 同じく赤谷遺跡で平成 24 年 4 月に発見されたばかりの未発表資料である。三叉文や円文が浅く彫られ、製作途上とも思われる。流紋岩製。
 29. 大正 8 年の朝戸高山「骨董玩弄趣味原稿」に荘川出土とあり、林 (37) によれば発見字名は不明であるが朝戸高山が明治 31 年に購入したとある。従って多賀 (40) がこれを六廐芝野資料にあてた事にはやや無理があろう。また天羽 (63) ではこの資料を御物石器部位の名称のサンプルに用いているが、上部と下部の名称位置は明らかに誤りである。吉朝 (153) 参照。
 30. 藤本 (143) の丹生川村史に初出。堤氏蔵。背面溝がある。半欠品。
 31. 『日本石器時代人民遺物発見地名表』4 版 (大正 6 年) に石器とある。地名表には土器・土偶・石鏃・打斧・磨斧・石錘・凹石・曲玉などとともに枕石が記録される。神岡町柏原向山と同一地名であり注意を要するが、かつて三頭石斧・環状石斧・石冠・土偶などの遺物が出土し、その一部が柏原神社に収蔵されているとの話もある (『西田遺跡』1997) 参照。
 32. 藤本 (143) に初出。昭和 27 年の開田工事の際に出土した。緑色片岩製の棒状頭式であるが底面が尖り、北陸型に近い。浮線網状文土器も出土している。
 33. 凝灰岩質の粗製品で、未製品の可能性がある。一部欠損。
 34. 旧村史 (53) と『カクシクレ遺跡』岐阜県文化財保護センター (1997) にも紹介されている。御物石器は昭和 34 年、石剣・石刀・石冠・磨斧等とともに出土している。発見者の橋本氏によれば、清水の湧く近くから発見されピット内に木の皮をかぶせてあったという。
 35. 略図が林 (37) にあるが、清見村二本木資料によく似ている。加藤輝次によるスケッチにも丹生川村旗鉾として二本木資料が描かれる。従って存在は疑わしい (第 10 図)。
-
- 第10図 林(1)・橋本(2)・加藤(3)により旗鉾とされる資料 実際は二本木
36. 同じく林の略図があり、目録や橋本 (90) も二本木野首八幡神社境内出土としているが、野首遺跡は隣接する夏廐にある。初出する地名表にある様に、清見村では二本木と夏廐野首八幡神社境内の 2 ヶ所出土が正確であり、林の誤りが混乱を招いている (第 11 図)。
 37. 県史 (71) 初出。シンプルな形状であり、橋本は最も初期に位置づけている。昭和 49 年の大原
-
- 第11図 林(1)と橋本(2)による二本木野首資料実際は夏廐野首

小学校改築工事の際に出土し、硬玉大珠等も発見されている（文献 91）。

38. 平成 20 年に実見・測図。吉朝 (173) 参照。砂岩製

39. 西宮市辰馬考古資料館に収蔵される、旧藤木コレクション資料。西脇 (118) 参照。林 (37) の二本木野首資料の図とは異なるものである。なお加藤スケッチには二本木として全く異なる図がある。これが林の二本木資料かも知れない（第 12 図）。

40. 大野雲外「飛驒発見石器に就て」(5) に図があり、高山付近とされる。朝戸高山の文に「長さは最も小さく八寸位の品にて凸凹の彫刻の外に左右に貫通した孔を有する品が益田郡小坂町大洞山中より出た之を古川町の佐藤泰郷氏が採取してあったが現在は他国へ散逸した」とあり、こちらの出土地



第12図 加藤スケッチにある二本木資料

の方が正しいと思われる。天羽 (63) になぜか坂下とあり、橋本 (90) は両者を併記している。

41. 清見村誌 (91) に昭和 48 年頃千原鹿造発見の記録がある。有孔、花崗班岩製。頭頂溝・背面溝を伴う。

42. 太江北村氏蔵。県博資料 (92) に初出。一部欠失。

43. 古川町村坂コレクション。文献なし。同家にて実見・測図。一部欠失。

44. 中野山越遺跡出土。竹原氏所蔵。未報告。流紋岩製。

45. 地名表 (30) に上気多として打斧・磨斧・石冠とともに枕石とある。詳細不明。

46. 岡前出土、森下氏旧蔵、未報告。十字文様がある。昭和 58 年頃諏訪神社前にて発見された。

47. 地方史の文献 (111) 初出。細川氏蔵、一部に自然面が残る敲打整形。

48. 連結三叉文のある優品。吉朝 (148) 参照。同所中村氏蔵。

49. 同所出土、棒状頭頭部のみ。円文・頭頂溝あり。

50. 黒内古田氏蔵、文献なし。浅い背面溝あり。

51. 高山市郷土館角竹文庫に残る実大略図資料。「細江村数河宮田出土 種村義郷」と記される。

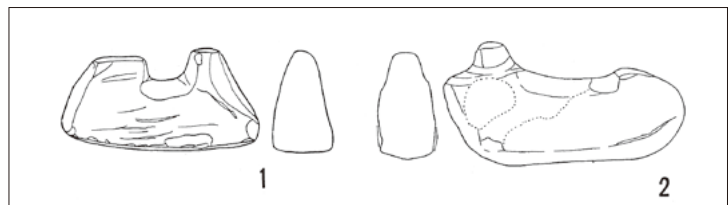
52. 最も著名かつ優美な資料である。文献も多く 3・5・7・8・16・26・63・66 などがある。長さ 41.5cm、重さ 3.75kgもあるこの石器は文化年間の発見で、水月庵に納められ「誕生石」と名付けられて安産のお守りとされていたといわれる。

53. 林 (37) に 52 の外 1ヶ所の記述があるのみ。

54. 古川町村坂コレクション。天羽 (63) に石神とあるのが初出。

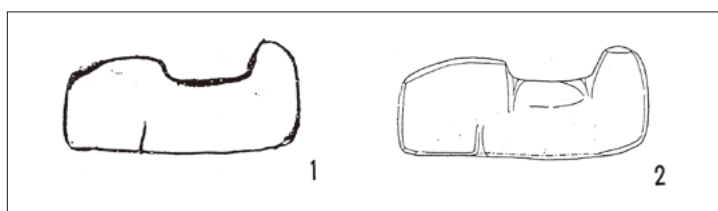
55. 平成 4 年、梨ヶ根水ヶ平にて土地改良時に出土、発見者尾上氏、現所蔵者山下氏。『どっこいし』59 号に報告がある。吉朝 (149)。

56. 赤木清による報告 (34) があり、現在江馬修コレクションとして高山市が保管する。橋本 (90) は北陸型とするが、断面は四角形である。



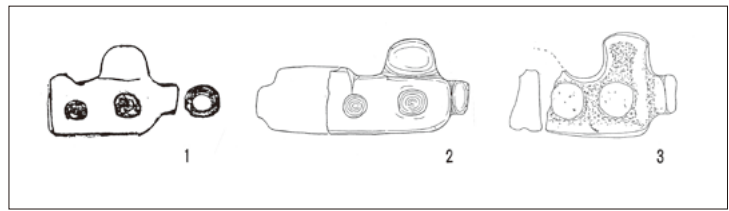
第13図 1は橋本が塩屋として用いた資料 実際は 1笹津 2塩屋

57. 千代の鏡 (2) に図があるが詳細不明。
58. 栗山コレクション目録 (115) に写真が掲載される。ただし橋本『御物石器論』(90) の図は、誤って笹津資料 (富山県) を用いており、明らかな間違いである (第 13 図)。
59. 林直樹 (127) に写真が掲載される。
- 60～63 土田 (89) に紹介される資料で、いずれも耕作中に発見されたもの。家ノ下報告書 (145) によれば 60・61 は蒲氏蔵、62・63 は野村氏蔵 (但し 62 は蒲氏より贈られたもの) とある。63 は報告書では写真のみ掲載されている。
64. 土田 (181) に報告がある。蒲氏蔵。棒状の頭部が角張っている。
65. 第 1 次発掘調査にて出土。
66. 第 2 次発掘調査にて出土。5 点ほどの破片があり北陸型と思われる。
67. 第 1 次発掘調査にて出土。破片 5 点で濃飛型であろう。
68. 第 2 次発掘調査にて出土。破片 3 点で濃飛型と思われる。なお 66・67 は故意に破砕された可能性が指摘されている。粘板岩製。
69. 宮ノ前報告書 (150) による。半欠品。
70. 同上。未製品か。
71. 宮ノ前Ⅱ (154) による。北陸型。被火熱破砕。
72. 同上。濃飛型。
73. 明治 15 年の野村助十郎による『探旧録』に、柏木萬氏より東京国立博物館に寄贈されたとある。文献 138 及び 173 参照。
74. 地名表 (30) に記録され、江馬修コレクションとして高山市が保管する。
75. 古川町の S 氏が宮川村の寺より譲り受けたもので、現在岩田氏蔵。挟り部分が広い。吉朝 (173) 参照。
76. 宮川村誌 (182) に記載あるのみで詳細不明。
77. 河合村史 (121) に図あり。頭部欠失。
78. 地名表に羽根とあり、林も (37) に記載するが、橋本 (90) の図は林文献の郡上郡川合村の初音資料を間違えて示したものである。従って西村資料については詳細不明である (第 14 図)。
79. 林 (37) に写真があり「角川発見 小字名不明」とある。砂岩質で比較的粗製と記される。頭部の突起が特徴的である。
80. 目録 (54) に初出し、天羽 (63) は西ノ森と表示するが『村史』(121) にある様に有家家ノ腰が正しい。松井氏蔵。
81. 村史に記載あり、半欠品。
82. 地主島田氏が昭和 30 年代に自宅前の工事にて発見したもの。成瀬満による紹介があり (56)、鈴木 (96) にも記載された逸品である。緑色片岩製。
83. 82 の資料より前、島田氏の先々代の頃の発見といわれる。加藤による報告 (29) があるが、橋本 (90) では林 (37) の原図の稚拙さから誤って創図しており、橋本の偏平頭 3 式は正しくは角



第14図 1は林原図による郡上初音資料 2は橋本が用いた河合村西村資料

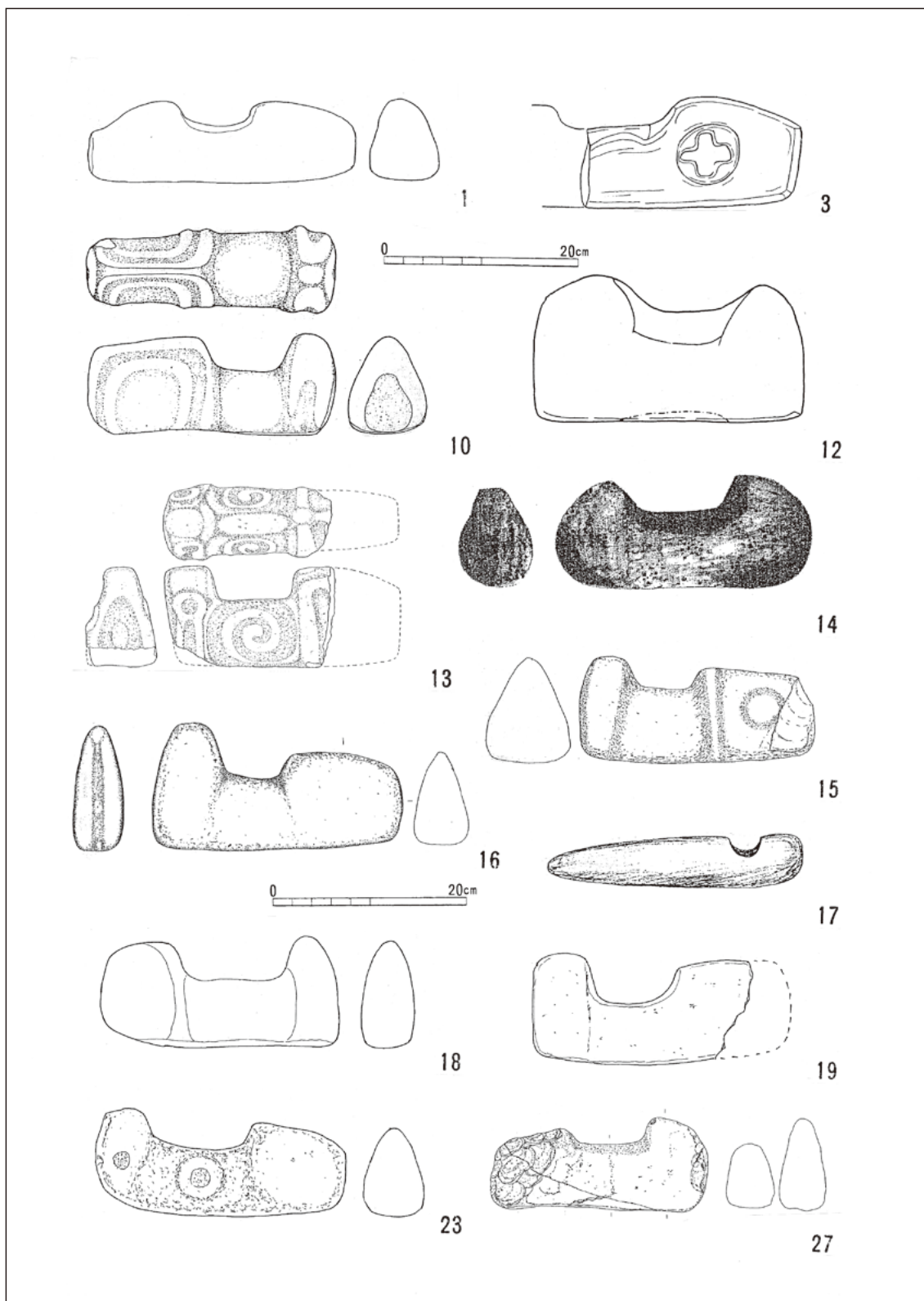
付棒状頭となる(第15図)。



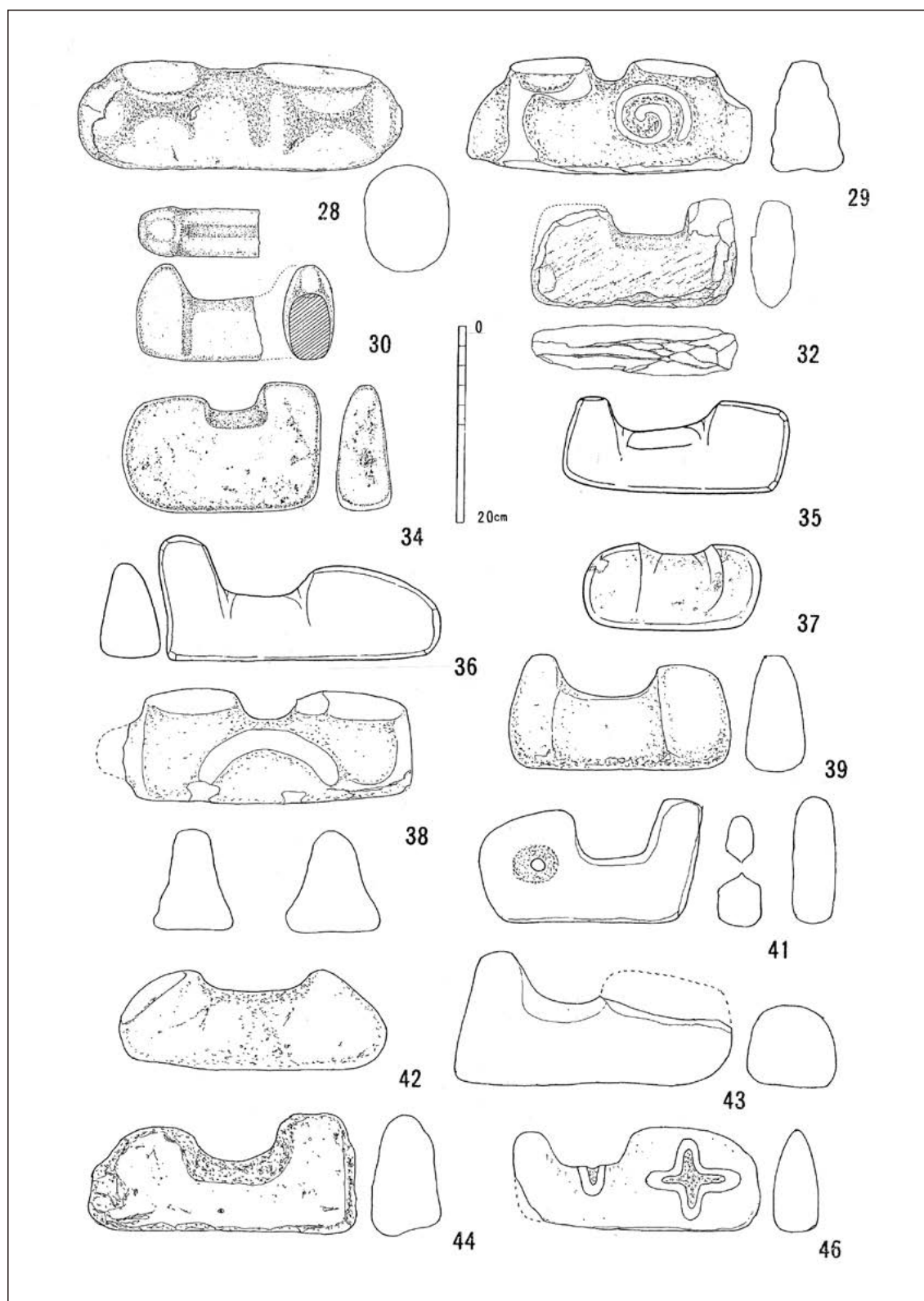
第15図 1は林原図による下呂乗政資料 2は橋本による創図 3が正確な図

84. 昭和60年2月頃、土地改良事業で遺跡が破壊された折、中学生熊崎君が採集したもの。文様は片面のみ、底面には連結三叉文の浅い凹みがある。砂岩製。
85. 同じく土地改良時の出土品。底面は平坦で滑らかとなり小さな凹みを有する。青灰色泥岩製。
86. 下呂町上原誌(180)に大正13年桂川稻次郎前にて石匙3と共に出土とある。十字文様、頭頂溝、背面溝をもつ。
87. 地元小池三次氏の話として、丹波英一郎氏蔵、搗屋の重しとして使用していたが昭和11年頃火災にて焼失したといわれる。
88. 旧下呂町誌(1964年)の写真中にみられるもので、荒川文雄氏調査とある。棒状頭の頭部破片と思われる。
89. 地名表初出。林(31)に写真と解説があり、石棒、石鏃、磨斧、曲玉、土器片とともに地下3尺のところより発見とされる。円文がいくつか表裏にみられる。林氏所蔵。
90. 犬塚(17)に写真がある。桜洞小林氏蔵。敲打により円文が浮文として表現される。砂岩製。
91. 同上、棒状頭頭部だけの破片。
92. 同所桂川氏により昭和15年頃、石垣から発見したといわれる。底面は磨滅しており、金属を砥いだ様な細い溝が走るが、あるいは後世に砥石として使用された可能性もある。吉朝(186)参照。砂岩製。
93. 昭和24年3月30日、野尻繁によって発見された。複雑な文様をもつ北陸型の優品。緑色片岩製。大江(61)参照。
94. 明治44年、野尻六助によって発見されたと柴田(6)にある。同時にほぼ同じ長さの石剣と石棒が出土している。人類学教室に送られた。喜田(26)にも紹介される。北陸型のシンプルな形で、93の様な文様は無い。
95. 大きな渦巻文と頭頂溝・尻面溝を備える棒状頭式。現在京都国立博物館に展示される。大江(61)、天羽(63)、鈴木(96)などに紹介。
96. 大江により調査された岩井田遺跡の出土品で、後期の土器が伴っていた事で、橋本によって初源形態の1つとされた資料であるが、晩期の遺物もあり疑問視される。大江(61)、増子(142)参照。円形の素文をもつ。
97. 岡村(10)に「益田郡小坂町大洞橋戸田ノ平という場所にて、明治7年菊名孫太郎発見」の記事がある。大野(5)にも「長さは最も小さく八寸位の品にて、凸凹の彫刻の外に左右に貫通した孔を有する」とあり、橋本(90)の坂下説は誤りである。佐藤泰郷の所有であったが、奈良丹波市町の木田氏へ譲渡された折の記念写真がある。この時のもう1点の御物石器は出所不明。
98. 地名表の文献のみで、詳細不明。味屋は前期遺跡として著名である。
99. 千代の鏡(2)に登場する。「石枕、益田郡上馬瀬 無笹安吉」の添え書がある。37cmの大型品で、円形の浮文がある。馬瀬村の郷土館展示。石原(183)
100. 私本版馬瀬村史に記録のみあり。石原(183)。
101. 同上。寺垣内遺跡のことか。

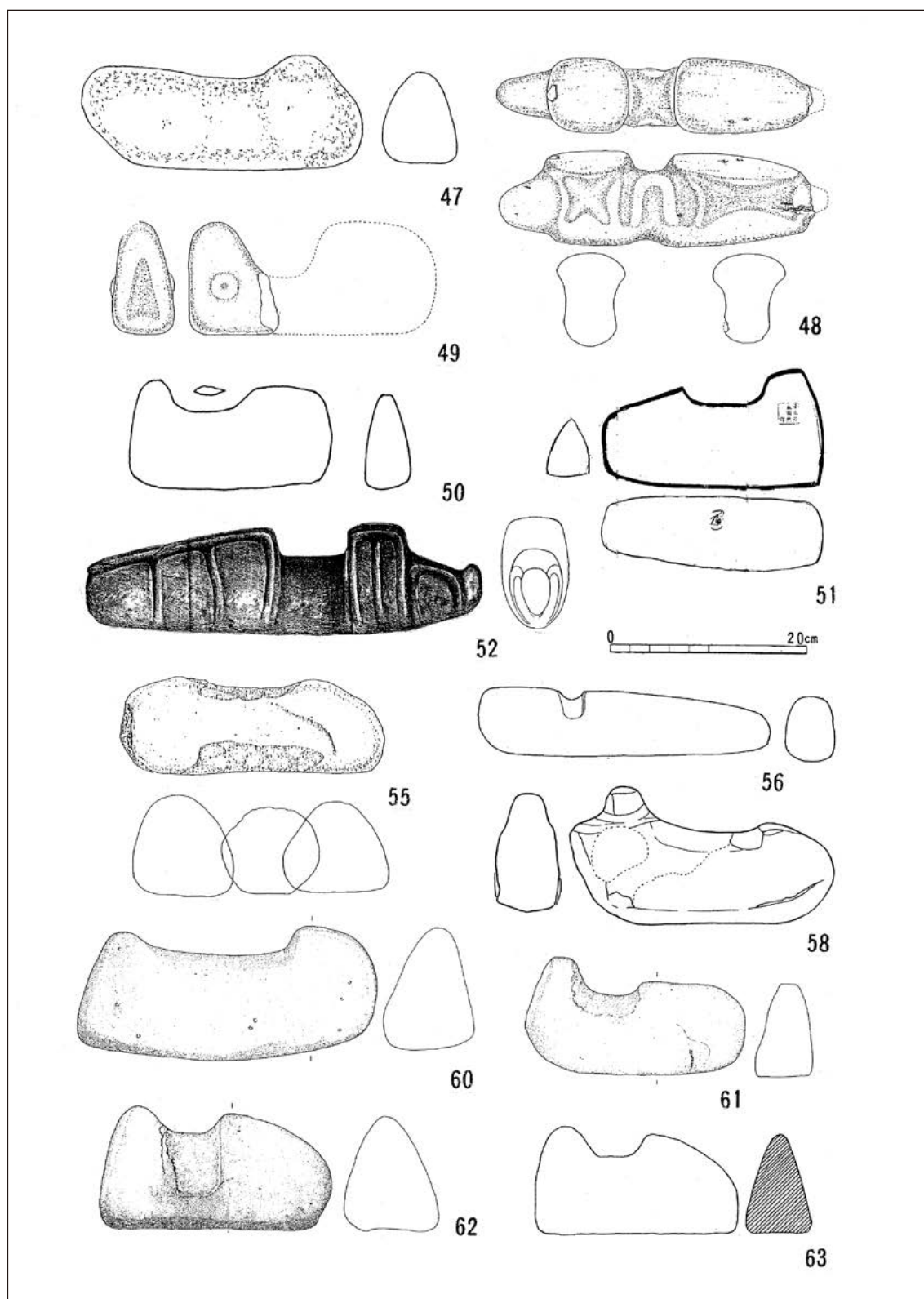
102. 加藤輝次 (29) に紹介される。同地農夫の発見になるもので、三角の浮文が連続する。加藤は発達した終末期形態ととらえている。高木酒造蔵、砂岩。
103. 橋本 (90) に中部山岳考古館にて実見とあるが、不明。金山町の河村氏によれば、昭和 31 年頃まで東沓部の観音様に奉納してあったという。断面は三角形に近いらしい。円文を伴う。
104. 林 (21) に郡上郡東村戸部出土とあるのが初出。後に金山町に編入されたため、正確な出土地名は金山町戸部寺本であり、金山町誌 (84) には戸部南宮神社境内より掘出されたとある。北陸型の優品、町指定考古資料として神社蔵。
105. 地名表初出。旧白川村史 (68) にも記録あり。現在辰馬考古資料館が所蔵する。「昭和 6 年 10 月 13 日、白川村例祭奉仕出張中、畠石積ノ中ヨリ発見。誕生石、屋根飾石トモ云」の藤木神官の箱の裏書がある。片面に円形の浮文あり、流紋岩。
106. 地名表及び荘白川 (46) に文献のみあり。
107. 赤木 (33) によると、晩期土器とともに御物石器 3、石刀、ヘラ状垂飾、磨製石斧などが出土したとある。形が変っていると書かれるが、欠損のためであろう。浄楽寺蔵、流紋岩。
108. 同文献。花崗岩製。江馬修 (赤木清) コレクションに含まれ、現在高山市が保管する。一部欠失。
109. 同文献。昭和 12 年頃に出土し、浄楽寺が所蔵するとある。半欠品、砂岩。
- 110～112. 昭和 56 年の発掘調査において、北陸系晩期前半の土器とともにこれら 3 点が出土した。著しく簡略化された中型・小型のものがあり、注目される。野村他 (103)。
113. 土田吉左工門『飛驒春秋』昭和 37 年 7 号 (1962) によると、かつて打斧・石皿・石剣・御物石器など多くの遺物が出土したとの記述がある。白川村史 (151)、多賀 (40) にも内ヶ戸南屋敷より御物・石棒出土の記録がある。遺跡は椿原ダムに水没した。
114. 高山市内の骨董店にて実見した、伝白川村出土品である。棒状頭部が残るが、破損部は再加工され磨き直されている。砂岩製。
115. 旧岡村利平コレクション中のもので、現在、京都国立博物館所蔵。北陸型瘤付面包頭式。優品であるが出土地は不明である。
116. 旧藤木コレクションの写真にみられる資料。頭部約 3 分の 2 破片で北陸型と思われる。頭部突起が石棒状に突出し、ソトワ (No. 52)、戸部 (No. 104) 資料に似る。



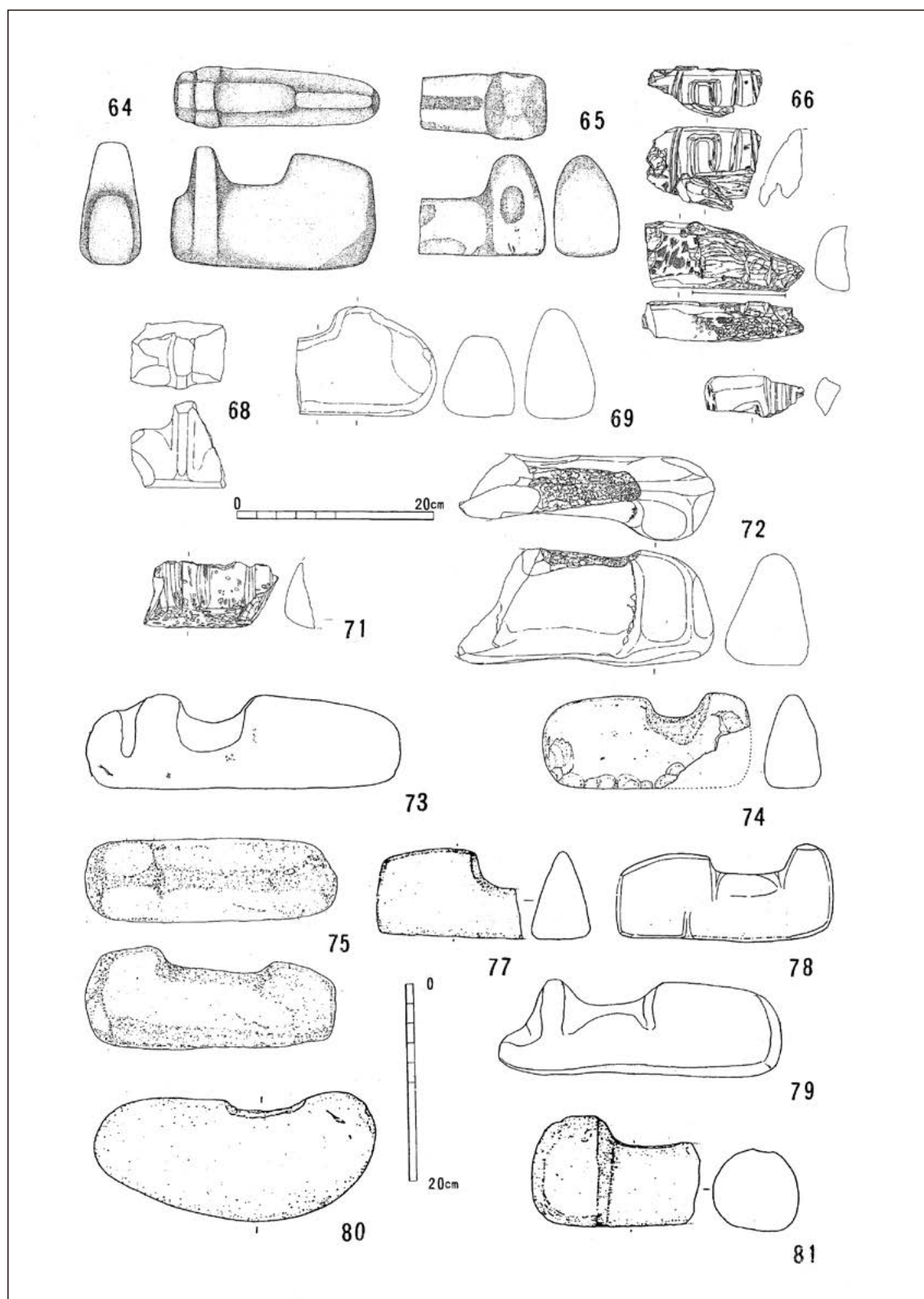
飛驒の御物石器集成図版 1



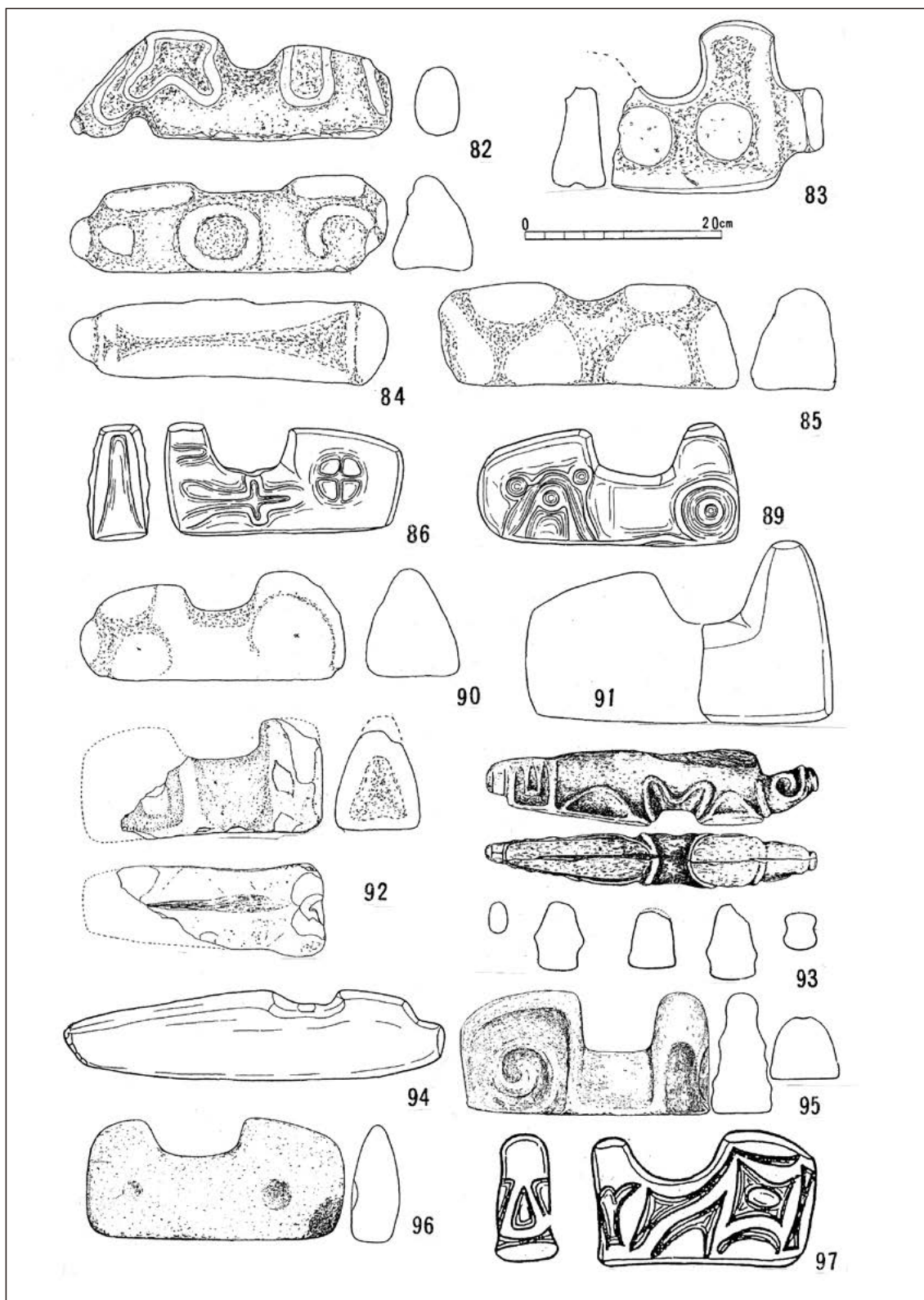
飛驒の御物石器集成図版 2



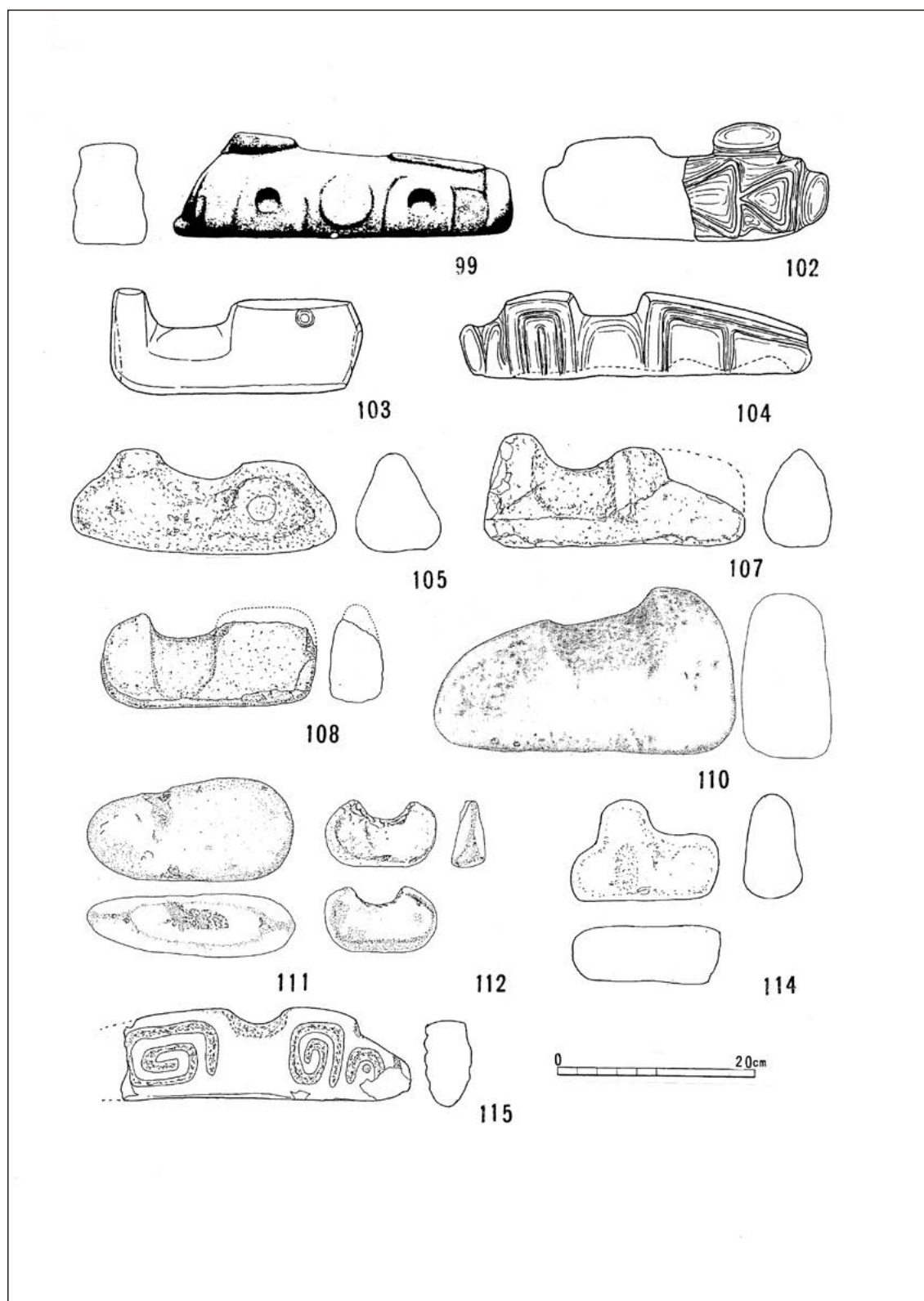
飛驒の御物石器集成図版 3



飛驒の御物石器集成図版 4



飛驒の御物石器集成図版 5



飛驒の御物石器集成図版 6

5. 橋本文献について

蛇足ではあるが、橋本文献（「御物石器論」）における資料上のいくつかの誤りをここに修正しておきたい。多くは文献操作上の誤りにもとづくものであろうが、橋本文献は御物石器研究に画期的な転換をもたらした重要文献であるだけに、今なお多くの研究者からの支持を受けているものと思われる。また無念にも早逝された橋本氏への思いも込めて、僭越ながら「御物石器論」における基礎資料の修正・変更をさせて戴くものである。

「御物石器論」修正部

- ・ 神岡町打保→宮川村打保
- ・ 清見村二本木 2 号→抹消、該当資料なし
- ・ 朝日村立岩宮ノ腰→抹消、天羽の宮腰と山腰のまちがいをそのまま踏襲か。
- ・ 宮川村塩屋 → 挿図のまちがい。富山笹津資料を使用。
- ・ 清見村坂下 → 抹消、小坂町大洞橋戸が正当。
- ・ 下呂町乗政下島→挿図が不正確 棒状頭式が正当。
- ・ 河合村羽根西沼→挿図のまちがい。郡上初音資料を使用。
- ・ 石冠 B - II 型 21 吉城郡国府町→郡上郡白鳥町前田。

さらに橋本分類における問題点についても、少し触れておきたい。

面包頭式・偏平頭式・棒状頭式の分類にあたっては、頭部形態に基準を置いているが、厳密に区別出来ない資料もかなり多い。特に面包頭式は、増子の指摘にもあるように（文献 142）、未製品や、他の型式に含まれる要素が強く、また自然面を多く残す点でも省略形態ととらえることも出来る。

第 9 図は、橋本分類による御物石器分類表を分かり易く整理したものであるが、このうち濃飛型面包頭 2 式は、橋本文献中ただ 1 点の資料である。この資料について神村透は、「一断面形は長楕円形であり、粘板岩製・彫刻・研磨という特徴から北陸型である。橋本は実見していないために濃飛型面包頭 2 式としているが、自分は北陸型面包頭式になると思う。その理由としては断面形の外に、全面に彫刻された文様があった点をあげる。頭頂面から頭部にかけて三本の沈線が入り、腹部上部には渦巻文がみられ、尾にも横走る沈線がみられる。御物石器第Ⅲ期になる。断面形が楕円形であるため立てるように置くことは出来ず、横にねかせて片一面の頭部から腹部を上に向けて置かねばならず、祭祀方法の違いを示す」と述べている（文献 136）。従って濃飛型面包頭 2 式は、存在しないとしてよからう。

資料 No. 56 の打保資料についても、橋本は北陸型としているが、断面は四角形であり、安定している。資料 No. 17 の国府資料もその可能性がある。

断面形と底面の観察は、御物石器研究にあたっての重要な要素であり、直接資料に触れての正確な情報が必要とされる。橋本が「磨擦器形祭器」と機能づけた根拠は、はなはだ希薄であると言わざるを得ない。

底面の様相は、濃飛型と北陸型との相違だけでなく、原礫選択と加工度の問題も含んでいる。飛驒地方において、底面が他の面と比較して少しでも滑らかとなっている個体は、96 点中 6 点あるが、1 割に満たない。中には砥石に転用されたかの様な個体もある。逆に底面に文様や凹みのあるものも 7 点ある。即ち濃飛型御物石器の底面には、自然のままの状態であるものが極めて多くあり、これは原礫選択の段階で既にほぼ完成されていた事を示している。

これらの点を踏まえつつ、分布や変遷の問題について述べてゆきたい。

6,分布について

前々章及び第3表で示したように、飛驒では74遺跡114点の御物石器が確認され、そのうち96点の型式が判明している。ちなみに美濃では35遺跡48点、型式判明個体は46点である。即ち岐阜県では162点の御物石器が存在することになる。

それ以外の発見地をみてみよう。まず富山県に28点、石川県に23点、愛知県に12点で比較的多い地域である。新潟6、福井4、長野3、静岡2、岡山2の他は、1点のみが三重・滋賀・和歌山・兵庫・鳥取・奈良・大分で、他に不明2がある(第4表)。

計251点の御物石器のうち、飛驒は実に45.4%を占めていることになる。美濃を含めると岐阜県全体の占有率は64.5%である。従って分布の中心域は飛驒にあり、主要分布域は岐阜・富山・石川・愛知にほぼ限定されると考えてよいだろう。

次に、型式別の分布状況をみてみよう(第16図)。

飛驒における濃飛型棒状頭式は54点、面包頭式が23点、偏平頭式が7点、北陸型が12点で、分布図には正確な出土地点の判明している94点を示した。

推積岩	砂岩	22
	泥岩	1
	粘板岩	5
火山岩	安山岩	6
	流紋岩	9
	凝灰岩	7
深成岩	花崗岩	3
	花崗閃緑岩	3
	花崗斑岩	1
変成岩	緑色片岩	4

第2表飛驒の御物石器石質別一覧表

	飛驒 (%)	美濃 (%)	計 (%)
濃飛型面包頭式	23 (24)	14 (30)	37 (26)
濃飛型偏平頭式	7 (7)	16 (35)	23 (16)
濃飛型棒状頭式	54 (56)	15 (33)	69 (49)
北陸型 面包頭 偏平頭 式	12 (13)	1 (2)	13 (9)
計	96 (100)	46 (100)	142 (100)

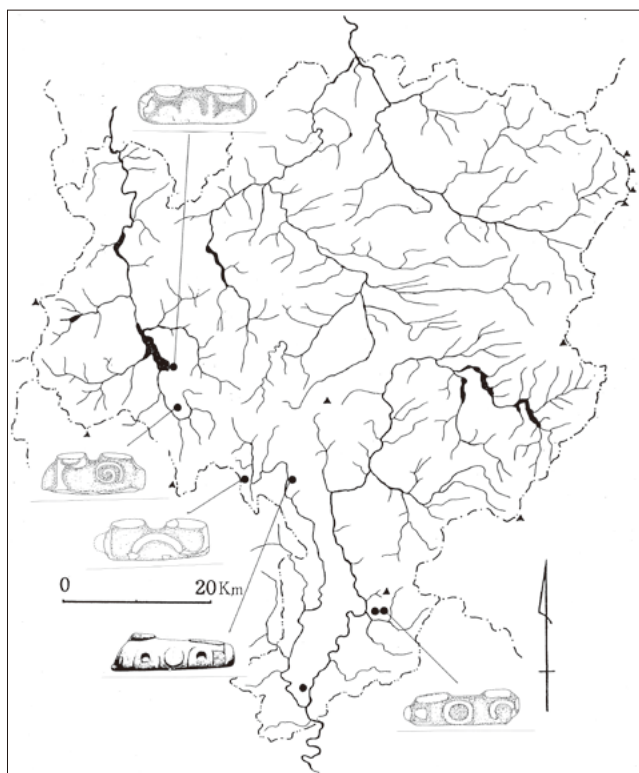
第3表飛驒と美濃の御物石器一覧表

	面包頭	偏平頭	棒状頭	北陸型	不明	計
岐阜 飛驒	23	7	54	12	18	114
岐阜 美濃	14	16	15	1	2	48
富山	4	1	14	6	3	28
石川			11	9	3	23
愛知	1	1	4	3	3	12
新潟		2	4			6
福井	1	1	1	1		4
長野	1	1		1		3
静岡		1	1			2
岡山				2		2
滋賀				1		1
和歌山				1		1
兵庫			1			1
奈良				1		1
三重				1		1
鳥取			1			1
大分				1		1
不明			1	1		2
計	44	30	107	41	29	251

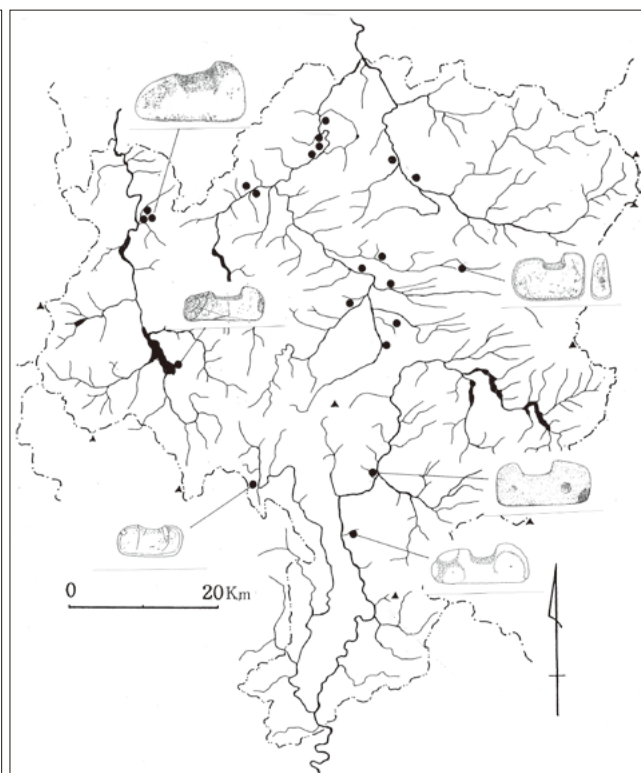
第4表全国の御物石器の型式一覧表

	面包頭	偏平頭	棒状頭	北陸型
無文	18	0	34	4
円文	2	4	10	0
十字文	0	0	4	0
三叉文	0	2	0	1
渦巻文	0	1	2	0
浮線文	0	5	9	4
沈線文	0	0	1	2
E字文	0	0	0	9
有孔	0	0	2	0
頭頂溝	1	1	11	0
尻面溝	0	1	4	0
背面溝	0	0	8	0
角	0	2	7	2
尾	0	6	0	2
瘤	0	2	0	4
底面凹み	1	3	3	0

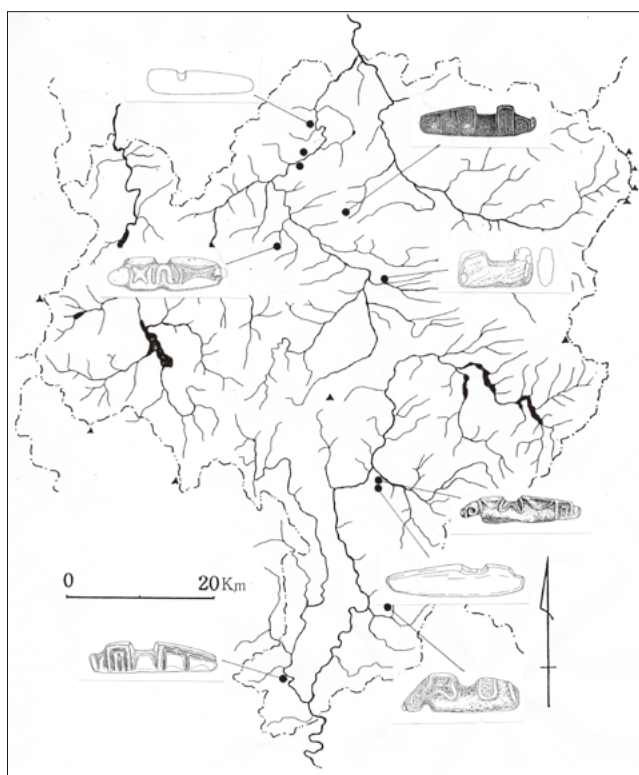
第5表飛驒の御物石器の文様及び属性一覧表
(文様の重複あり)



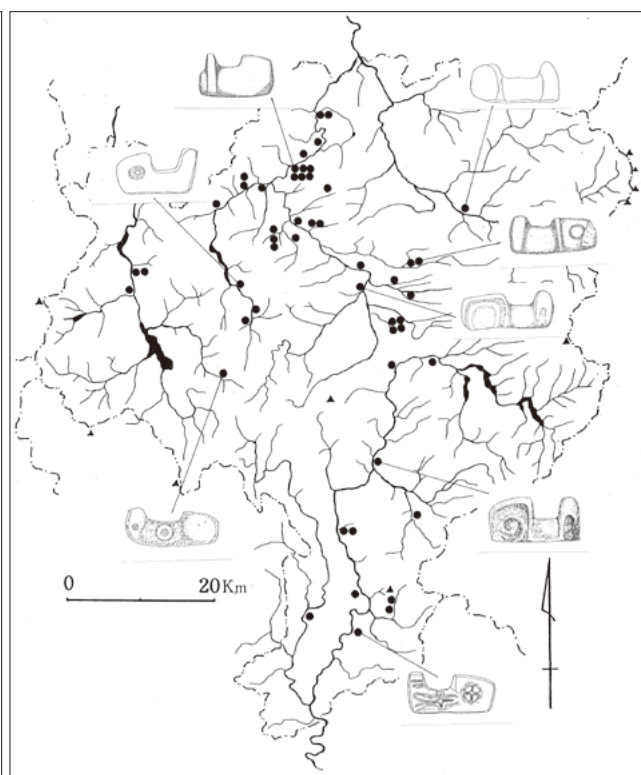
濃飛型偏平頭式



濃飛型面包頭式



北陸型面包頭・偏平頭式



濃飛型棒状頭式

第16図 飛驒の御物石器分布図

偏平頭式が南飛驒、北陸型が北飛驒に分布の偏りをみせるのに対し、面包頭・棒状頭は全域に広がっている。これは、既に橋本や増子によって指摘された傾向である。従って御物石器の最盛期が棒状頭式期にあり、面包頭式もこれに準ずる形である点に異論はない。ちなみに美濃の資料を型式別にみるならば、偏平頭 16、棒状頭 15、面包頭 14、北陸型 1 となる。偏平頭式が最も多い点と、北陸型が少ない点で、飛驒とは対照的であることがわかる。

全国的には、棒状頭がやや多く、分布の中心域から遠ざかるにつれて北陸型に偏ってくることが指摘される。

7, 文様について

橋本は、一部の沈文を除いて御物石器の文様が、該期の縄文土器文様との関連を持たないとするのが正しいとしている（文献 90）。

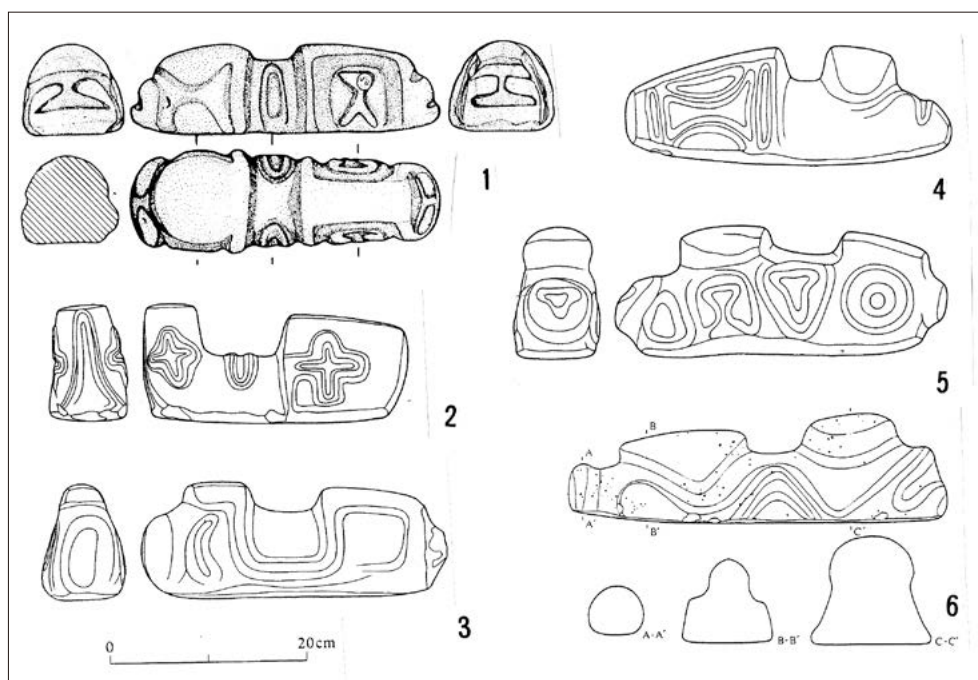
増子は、円文・渦巻文・連結三叉文を浮文として施す段階と、玉抱き三叉文・E 字状を施す段階とに大きく区分した（文献 142）。これは天羽の提唱した型式分類（文献 63）に近いものである。

飛驒の資料をみると（第 5 表）、まず無文の個体の多い事が指摘される。棒状頭で 34、面包頭で 18、北陸型で 4 ある。全体の 58%にあたる。

棒状頭式に円文や十字文・沈線文が多いのに比し、偏平頭式ではずっと少なくなる。これに対し美濃では、偏平頭・棒状頭ともに文様が豊富で、装飾性に富んでいる観がある（第 17 図）。E 字状文は北陸型に限られ、E 字状渦巻文に変化しているものもある。

文様ではないが有孔品が 2 点あり、いずれも棒状頭式である（No. 41・No. 97）。新潟県寺地資料もやはり棒状頭式と思われ、X 字状の浮線文を伴う（第 18 図 1）。斧状石冠にも稀にみられる特殊例であり、孔に特に意味はないと思われる。

頭頂溝・尻面溝・背面溝は、ほぼ棒状頭式に限られるといってよい。頭頂溝に特に顕著である。「老



第17図 美濃地方の御物石器 (文献88 157 171より)

いねずみ」といった特殊石冠類型に共通する特徴であり、後にふれることにする。

角は棒状頭、尻・瘤は偏平頭と北陸型に多い傾向がある。考えようによっては角・尾・瘤といった細部形態は、偏平頭・北陸型のように本来的に備わるものが、面包頭式では形骸化し、消失・省略の方向にあるということもできる。無文例が多いのも、省略形態との認識があってもよからう。ただ単なる省略でなく、何らかの痕跡を残す抽象化現象と考えるべきであろう。

底面の文様や凹みについては、偏平頭式の連結三叉文例（No. 84）以外は、浅い溝状（No. 92）あるいは円形の凹み（No. 10・No. 85 他）である。新潟県の細池資料（偏平頭式）では、四角く深い挟り部が備わり特異な例となっている（第 18 図 2）。

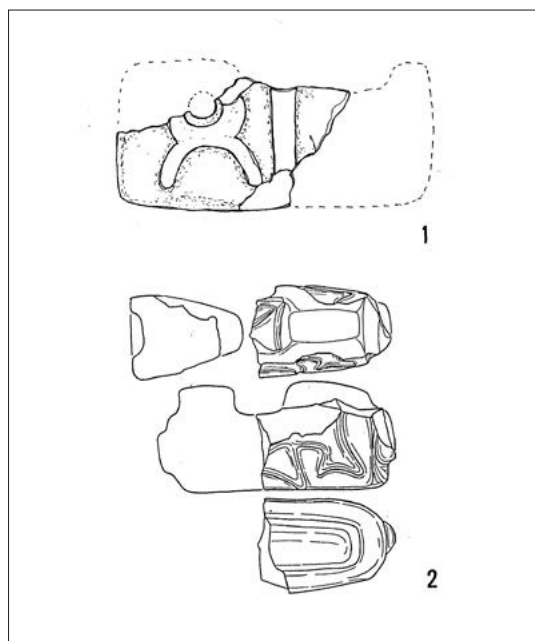
次に、個々の遺物の中でやや特殊な例をみてみよう。

第 19 図 1（No. 48）は、茶褐色を呈する片岩製の完全磨製品で、尾部を欠損するが北陸型偏平頭式に角と尾の備わるものである。頭部に X 字状、腹部に連結三叉文状の沈刻文と、挟入部に U 字状の浮文が両面にみられる。角は円錐形に突出し、尾も同様にあったと思われる。挟入部の反対側（腹面）にも敲打による浅い挟りが備わり、他に例をみない。腹面は丸く、安定して置くことは出来ない。類例として、北陸型で角と尾をもつ古子資料（第 19 図 3、橋本による北陸型瘤付面包頭 1 式、No. 93）に近い形態をなす。文様的には濃飛型偏平頭 3 式の中山薬師 3 号（第 19 図 2）と共通しており、断面形が異なるだけである。

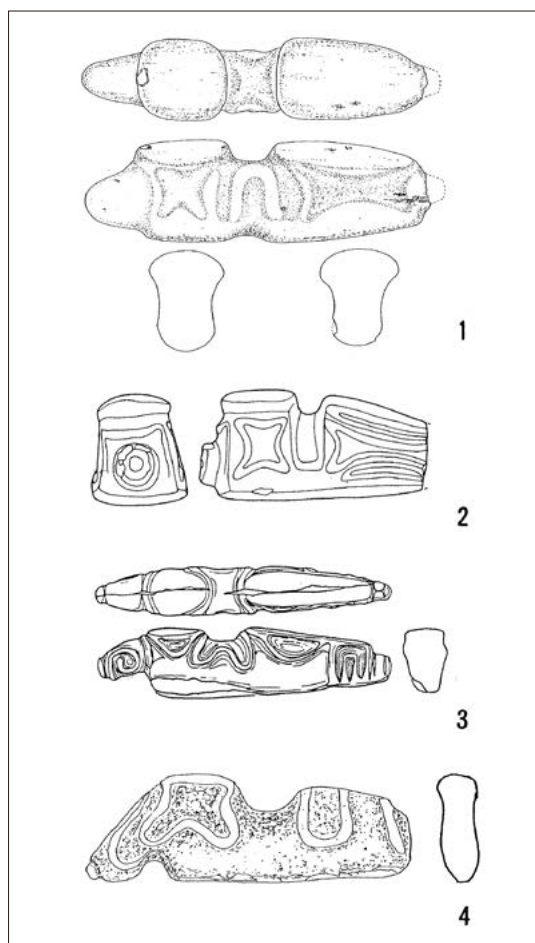
第 19 図 4 の乗政資料（No. 82）は、これまで濃飛型面包頭式として扱われていたが、断面形により面包頭式に角（瘤？）のつく北陸型である事が判明した。しかし頭部形態は偏平頭とみる事も出来、また角の形状は全く特異である。頭部には半月状、腹部には U 字状の浮文がつく。

48・93・82 とともに、一般の北陸型とはやや異なるタイプであり、いわば折衷形あるいは過渡期の形状としてとらえられるものであろう。

これらの観点をふまえた上で、次に御物石器の祖形と祭祀の問題について考えてみたい。



第18図 1新潟県寺地 2同細池



第19図 特徴ある御物石器

8,御物石器の祖形について

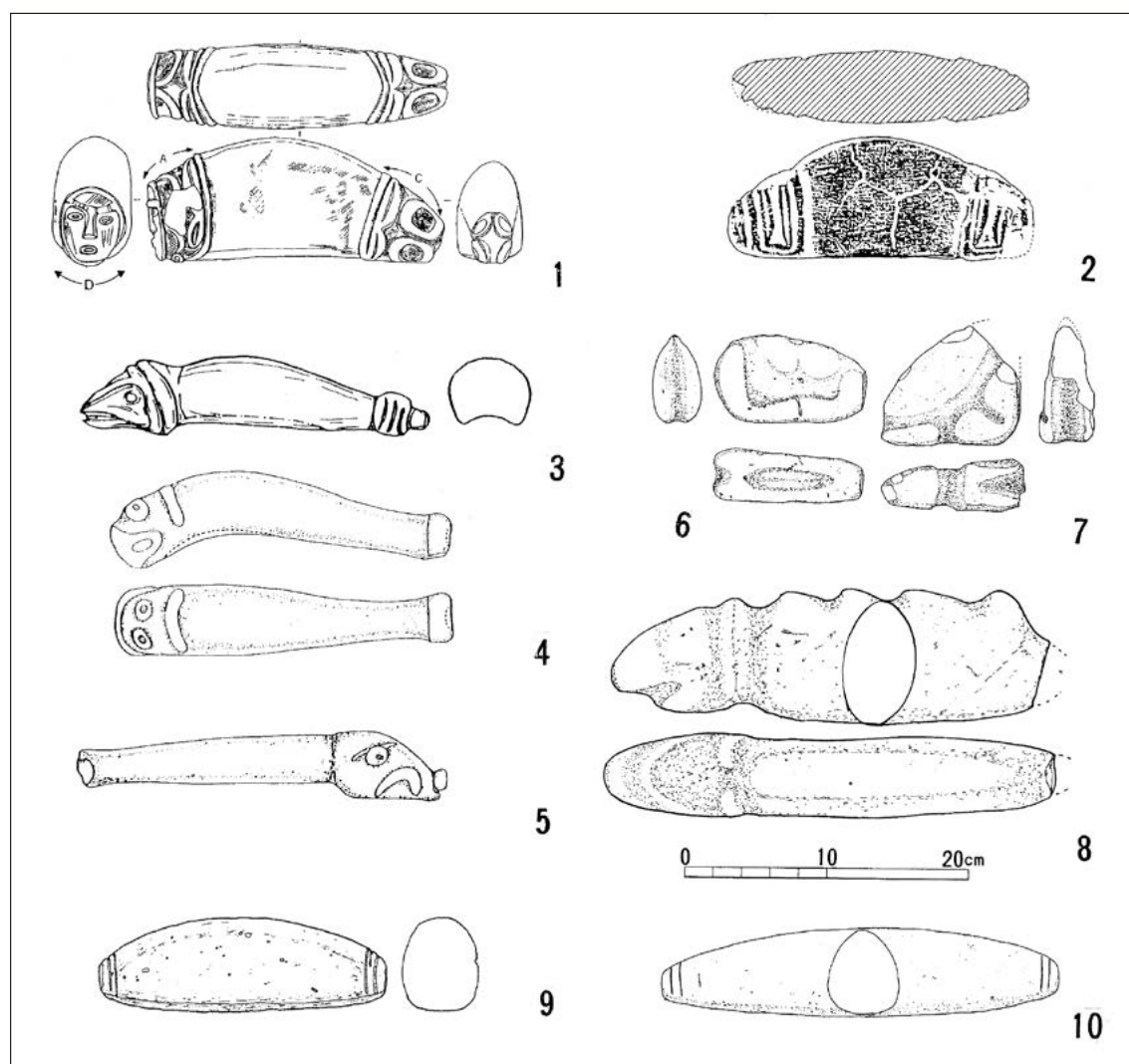
御物石器の祖形についての論考は、昭和初期に喜田貞吉の抉入石斧説（文献 26）と、吉田富夫の着装刀剣模倣説（文献 39）があったが、この縄文・弥生共存説は所属年代の相違により、当然否定されることとなった。

橋本は、動物を原形とする異形石棒を、直接ではなく御物石器の成立に関与した石器と評価を下した。そこには、擦り石を原形とした石冠祭祀の延長上に御物石器の誕生があるという「磨擦器形祭器」説に主眼が置かれていたからであろう。橋本によれば、御物石器の腹面の荒れは、一定の運動を加え操作することにより残された使用痕跡であるとされる。

増子は、これを製作時の研磨の過程と認識し、橋本説を否定した。即ち偏平円礫を半割することで裏面の平面化と擦痕が形成されたとしている。

飛驒においては、5章で述べたように、腹面（底面）に何らかの顕著な加工痕跡を残す資料はごく少量であり、大部分が石材選択の段階での自然面のまま残されている点を強調しておきたい。

御物石器の最大の特徴は、抉り部の存在にあり、種々の祭祀遺物の中で独特の形態を保持している点は重要である。



第20図 海獣形石製品(1・2)、異形石棒(3～5)、異形石器(6～8)、かつをぶし形石器(9・10)（文献 174・175より）

縄文時代後・晩期には、日本各地で局地的に生起した祭祀遺物が存在する。東北地方（秋田・青森）に分布する青亀刀形石器、福島、茨城に発見される海獣形石製品、飛驒及び富山・福井にほぼ限定される古いねずみ石冠（異形石棒の一種）、飛驒・石川・富山・新潟及び九州の一部に存在するかつをぶし形石器（魚形石製品）などである（文献 174・175 参照）。

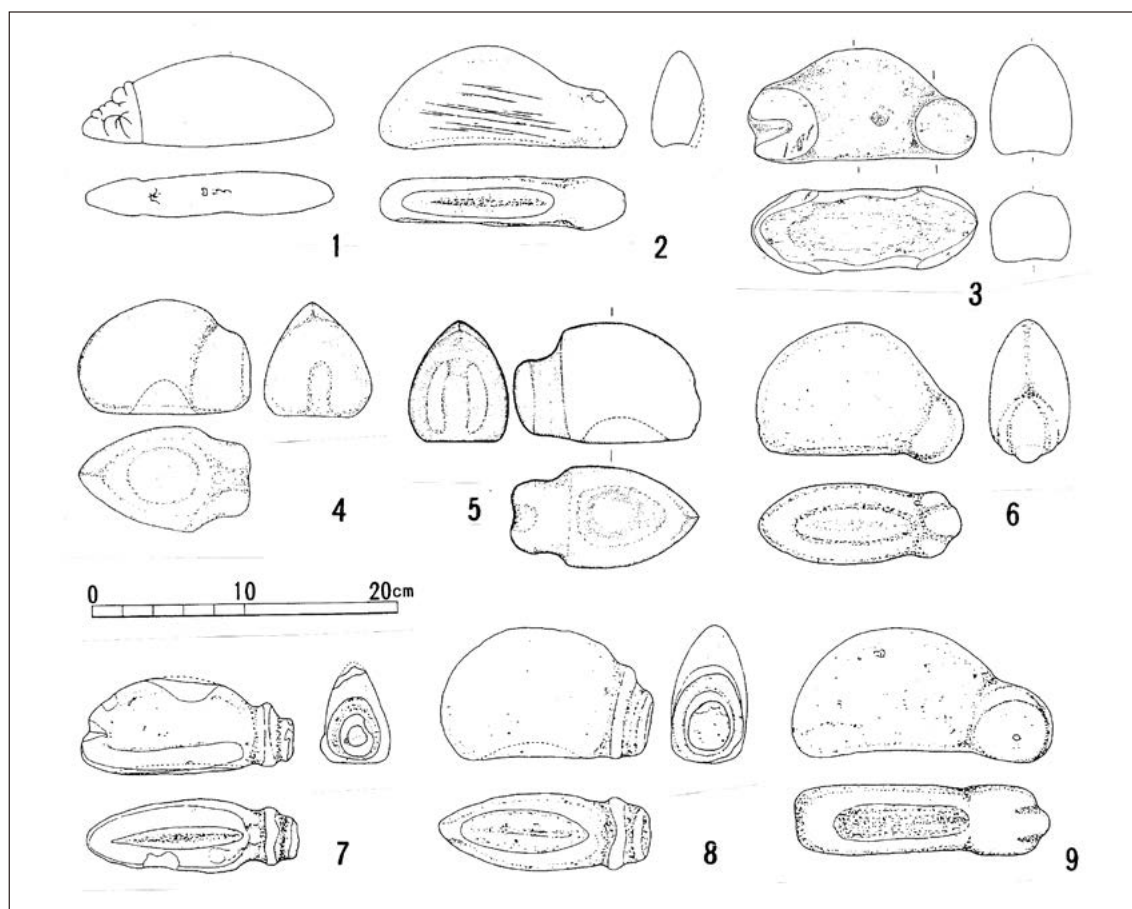
石冠・御物石器も、分布の中心が飛驒である点で局地的に生起したというが、一部の石冠は東北地方にまで分布域を広げ、また御物石器は飛驒より西の方角に僅かではあるが波及している。

独鈷石は、東北・関東・飛驒の3地域に集中する傾向はあるが、東日本に広く分布する点で、石棒・石剣・石刀に準ずる、汎日本的な祭祀遺物である（文献 187）。

そこで、橋本が認めるように、異形石棒や石冠と共通した分布領域をもつ御物石器との関連をもう少し検討してみよう。

異形石棒・古いねずみ石冠・かつをぶし形石器の原形は明らかに動物であり、サケ・マス・イノシシ・クマ・ウサギ・ナマズ・サンショウウオなどが候補としてあげられる。これらは左右非対称、頭部と胴部の区別など、御物石器に共通した特徴を備える。かつをぶし形石器も、初源形態は頭部と尾部の区別がはっきりしている（第 20 図）。

底面の凹み（溝）も、一部の御物石器に遺在している。特に注目されるのは、古いねずみ石冠及び一部の異形石器に特有の頭頂溝・尻面溝の存在であり、棒状頭式の御物石器のみに共通した特性である。当然、動物の表現の一端と考えられるとともに、その凹みの意図は豊穰・多産の祈りに通じるものがある（第 21 図）。



第21図 古いねずみ石冠（文献174より）

No. 48 の資料のように、挟りがほぼ一周する資料の存在は注目に値し、異形石器のいくつかと共通している。前田資料（第 20 図 8）は、御物石器には含まれていないが、明らかに動物の体形を取る大形石器であり、極めて近似する資料である。魚や両棲類を彷彿とさせるものがある。

老いねずみ石冠の頭部のいくつかの形態の中で、瘤状となっているものも一つの共通点である。瘤や角は、御物石器の製作にあたって特に手間のかかる部分であり、その性質において欠かせないものであったことが理解されよう（第 21 図 7・8）。

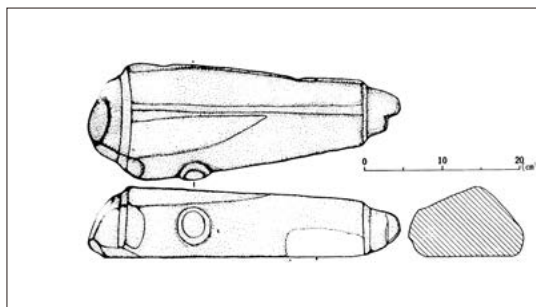
これらの点をみてくると、偏平頭式・北陸型と棒状頭式との相違が明確となる。即ち前者は動物の原形に忠実な造形により近く、後者は異なる変化を遂げていったパターンとして捉えられ、それは分布の状況にも反映している。棒状頭式（面包頭式も含む）は、飛驒においてさらに局地的に発達した退化形態なのであろう。

海獣形石製品は、アザラシ・オットセイを模したものであり、かつをぶし形石器は日本海側の一地域において、サケ・マスを対象とした造形である。老いねずみ石冠は、恐らくはイノシシ・ウサギといった哺乳類であり、美濃地方山間部にいくつかみられる異形石器（第 22 図）についても、当地特有のオオサンショウウオ（現在特別天然記念物）の造形と考えられる要素がある。内陸部においても、サケ・マスの重要性は言うまでもない。

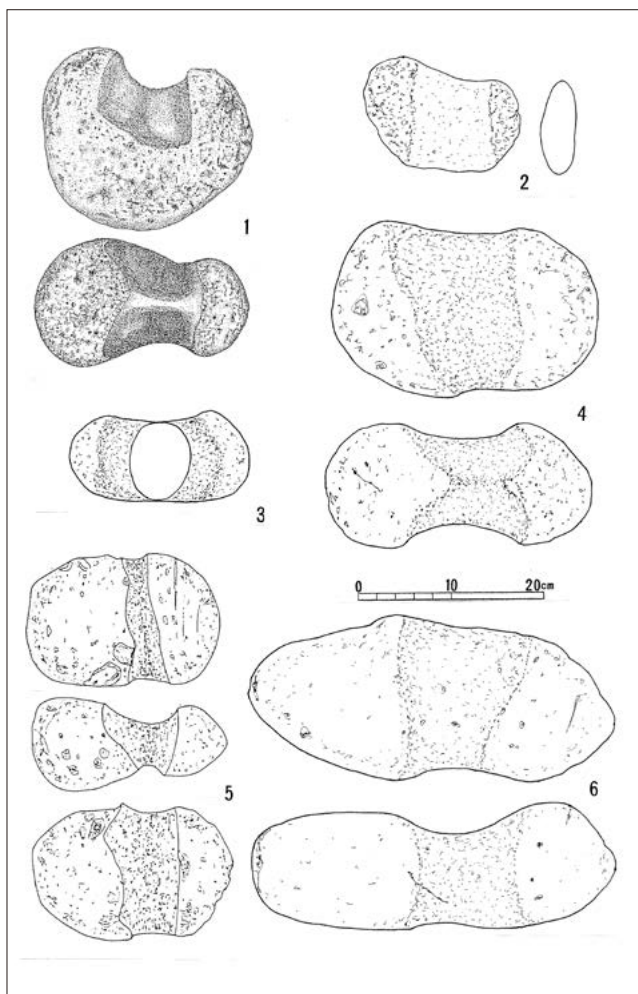
これらの造形の意図は、やはり豊猟・豊穰祈願であり、あるいは深遠なる自然への畏怖の呪術具としてとらえられるものであろう。

以上、動物模倣説の立場で御物石器の祖形について述べてきたわけであるが、ここで全く別の観点から検討する必要がある遺物も存在することを記しておく。

「猿石」と呼ばれる、凹部をもつ大型石製品は、時期は特定出来ないが中～後期の遺跡からも発見されることがあり、立石の回りに置かれていた例もある（文献 120 他）。凹部を敲打で仕上げる場合と、全て自然石の場合とがあり、一見粗雑な御物石器の観がある。後世の金勢信仰の一端としての混在も考える必要があるが、挟りに対する何らかのこだわりが感じられ、注意に値する遺物である（第



第22図 異形石器（文献88より）



第23図 猿石(陽石) 1.古川町中野山越 2.高山市
3.丹生川村町方 4.高山市 5.高山市垣内 6.高山市二反畑

23 図)。

9,発掘事例について

御物石器はこれまで、石冠・独鈷石同様に破壊されることのない部類の呪物として取り扱われているといっておく。しかし近年、被火熱と破碎を伴う御物石器の発掘事例がいくつか見られるようになり、新たな展開が期待されることとなった。

金沢市米泉遺跡では、出土した 2 点の御物石器のうち 1 点が、上半分が火熱を受けたように淡茶褐色に変色している例を報じている (文献 119)。

飛驒でも宮川村家ノ下遺跡の事例がある。家ノ下は過去 7 点もの御物石器が出土している注目すべき遺跡であるが、近年の発掘調査で晩期中葉の御経塚式・中屋式土器段階の所産であることが判明するとともに、配石遺構の上から同一個体 5 片の粘板岩製御物石器が焼けた状態で出土し、細かく打ち砕かれた意図的なものであるとされる (文献 145)。

御物石器に、被火熱・変色の痕跡のある個体は、全ての型式中にいくつかみられ、何らかの火を伴う儀礼の存在が想定される。ただ、完形の個体が多い点 (飛驒では 56%) については、素材の相違により、粘板岩・泥岩製のものが被火熱でもろくなり易い点も考慮する必要がある。

この他、新潟県寺地遺跡では長楕円敷石を伴う有柱方形配石の周辺から御物石器が出土し、寺村はこの配石が男性に関係ある要素を含む配石にとらえ、生や性をめぐる地母神信仰の場ではなかったろうかと述べている (文献 116)。

このように御物石器をめぐる諸問題は、発掘調査の成果に深くかかわっており、その出土の状況が大きな意味を持っている事は確かである。特に湧水地点における発見 (遺物 No. 34・No. 93 など)、水辺で直立状態にあったという知見 (和良村井ノ向遺跡資料) など、老いねずみ石冠にも共通した要素があり (文献 174)、居住空間内とは限らない場所での儀礼の存在の可能性にも注意する必要がある。

また彩朱やウルシ状皮膜の痕跡の例も少量あり、御物石器研究にはまだまだいくつかの課題が残されているのである。

10,おわりに

筆者と御物石器との直接の出合いは昭和 39 年、斐太高校 1 年生の夏であった。高山市郷土館 1 階のガラス戸棚の中に、荘川村出土・神通寺蔵のそれはあった。小林幹館長の「自由に出して、見てよろしい」の言葉に甘え、しわくちのハンカチを広げて、ミノルタの小さなカメラに収めた。御物石器の冷たくずっしりとした感触は、今でも手に残っているようである。

あれから 40 数年。目につく御物石器はほとんど実測し、データの蓄積に励んできた。農家のリンゴ箱の中にも、いくつか眠っていた。

昭和 51 年の橋本正氏の「御物石器論」にショックを受け、これ以上の論考はなし得ないと思いつつも、自らの考えを捨てる気にはなれなかった。石冠研究を進める中で、一つの方向性を見出し、老いねずみ石冠・かつをばし形石器を書き終えた段階で、御物石器の再検討に入り、確信を深めていった。

御物石器の動物模倣論は、目新しい学説では決していないが、飛驒という地域の中で育った自分としては、その環境の中で感じ取った自然への憧憬とか畏怖といったものが、深くかかわっていると思う。飛驒ならではの、飛驒であってこそその縄文時代の呪術用石器群の存在が、必然として浮上してくるのであ

る。

勿論、橋本氏の理論には到底及ぶものではなく、また型式学上・編年学上の矛盾も解決のないまま論を進めてきてしまったが、先入観や偏見を除いて、実態をじっくりと観察し、研究を続けた結果の所見であることをご理解いただきたい。

近い将来、優秀な後学によって、また新たな発見によって御物石器の謎は必ず解明されるであろうが、その時、筆者の考え方の一部でも役に立つことがあれば幸いである。

はなはだ雑駁な論ではあるが、発表の機会を与えて下さった光記念館研究紀要関係者の皆様に、深甚の謝意を表するものである。

御物石器文献目録

1. 神田孝平 1886 『日本太古石器考』
2. 佐藤泰郷 1886 『日本古物小集会図録 千代の鏡』
3. 神田孝平 1888 「御物大石器に似たる石器」『東京人類学会雑誌』4-32
4. 神田孝平 1889 「第27版図解」『東京人類学会雑誌』4-41
5. 大野雲外 1904 「飛驒発見石器に就て」『東京人類学会雑誌』19-220
6. 柴田常恵 1912 「飛驒国益田郡小坂町長瀬発見の奇形石器」『人類学雑誌』28-3
7. 袖川村 1917 『袖川村誌』
8. 朝戸高山 1919 『鶯夢軒所蔵石器図 石のまきもの』
9. 大野雲外 1921 「或る奇形の石器に就て」『民族と歴史』6・2
10. 岡村利平 1921 『飛驒編年史要』
11. 山本栄一 1935 『恵那郡の石器時代』
12. 早川莊作 1926 『越中石器時代民族遺跡遺物』
13. 島田貞彦 1928 『有史以前の近江』
14. 林魁一 1928 「美濃郡上郡の異形石器」『考古学雑誌』18・9
15. 林魁一 1928 「美濃国恵那郡福岡村の石器時代遺跡及び遺物」『人類学雑誌』43-11
16. 犬塚行蔵 1929 「御物大石器と飛驒の異形石器」『考古学雑誌』19-11
17. 犬塚行蔵 1929 「益田郡萩原町縣神社石器時代遺物観覧記」『飛驒史壇』8-12
18. 中谷治宇二郎 1929 『日本石器時代提要』
19. 倉田一郎 1930 「越中国高岡に於ける石器時代遺跡」『人類学雑誌』45-5
20. 林魁一 1930 「御物石二就イテ」『山美水濃』5
21. 林魁一 1930 「美濃国郡上郡東村の石器時代遺跡及び遺物」
22. 林魁一 1930 「美濃国郡上郡典明方村小川の遺跡」『人類学雑誌』45-10
23. 林魁一 1932 「美濃国発見御物石の2例」『人類学雑誌』47-12
24. 林魁一 1933 「飛驒高山附近の石器時代遺物及遺跡」『史前学雑誌』5-2
25. 加藤輝次 1933 「朝戸高山師遺稿抄」『飛驒考古学会会報』2
26. 喜田貞吉 1933 「所謂御物石器に関する一考察」『考古学』4-7
27. 羽柴雄輔 1933 「神田孝平氏一行の飛驒旅行—青山入夢日記より」『ひだびと』11-3
28. 家高荒次郎 1935 「木曾に復御物石器」『信濃』4-5
29. 加藤輝次 1935 「二つの異形枕石」『ひだびと』3-8
30. 飛驒考古土俗学会 1935 『飛驒石器時代遺蹟地名表』
31. 林魁一 1936 「益田郡川西村出土の御物石器」『ひだびと』4-8
32. 林魁一 1936 「美濃北濃村前谷の遺跡及び遺物」『考古学論叢』3
33. 赤木清 1937 「白川村木谷の石器時代遺跡」『ひだびと』5-8
34. 赤木清 1937 「吉城郡坂下村打保出土の石冠と枕石」『ひだびと』5-10
35. 小林行雄他 1938 「近江坂田郡春照村杉沢遺跡」『考古学』9-5
36. 江馬三枝子 1938 「表紙の枕石（御物石器）について」『ひだびと』6-3
37. 林魁一 1938 「御物石器即ち俗称枕石に就いて」『人類学雑誌』53-9
38. 赤木清 1938 「大八賀村山口の森下遺跡(2)」『ひだびと』6-7

39. 吉田富夫 1940 「第八高等学校収蔵美濃国稲葉郡蘇原村の石器」『考古学』11-4
40. 多賀秋五郎 1941 『飛驒史の研究』
41. 後藤吉郎・多賀秋五郎 1943 『飛驒文化史概説』
42. 藤沢宗平 1949 「木曾谷の御物石器」『信濃』1-3
43. 小林行雄 1951 『日本考古学概説』
44. 高山市 1952 『高山市史』上
45. 信濃史料刊行会 1956 『信濃考古総覧』下巻
46. 岐阜県教育委員会 1957 『荘白川総合学術調査報告書』
47. 高堀勝喜 1958 「金沢近郊出土の御物石器」『古代文化』2-5
48. 大江傘・下形武 1958 『上宝村の先史時代』
49. 国府村 1959 『国府村史』全
50. 小林行雄 1959 「御物石器」『図解考古学辞典』創元社
51. 澄田正一 1960 「荒城神社縄文時代遺跡」『岐阜県指定文化財調査報告書』4
52. 久永春男 1961 「愛知県守山市牛牧遺跡』
53. 丹生川村 1962 『丹生川村史』全
54. 岐阜県教育委員会 1962 『岐阜県遺跡目録』
55. 萩原町 1962 『萩原町誌』
56. 成瀬満 1963 『木曾川流域の石器時代文化』
57. 紅村弘 1963 『東海の先史遺跡』総括編
58. 辻合喜代太郎 1964 「十字文様のある石製品」『飛驒春秋』9-2
59. 吉田格 1964 「石製品」『日本原始美術』2
60. 高堀勝喜 1964 「金沢市近郊八日市新保並びに御経塚遺跡の調査」『押野村史』
61. 大江傘 1965 『飛驒の考古学Ⅰ』
62. 小坂町 1965 『岐阜県小坂町誌』全
63. 天羽利夫 1966 「御物石器の研究」『考古学雑誌』52-1
64. 橋本澄夫 1967 「石川県鶴川町発見の御物石器」『古代学研究』47
65. 榎原芳久 1968 「岐阜県美並村発見の御物石器」『文化人類学研究会会報』4-1
66. 大参義一 1968 「御物石器」『岐阜県指定文化財調査報告書』11
67. 宮村 1968 『宮村誌』
68. 白川村 1968 『白川村史』
69. 大参義一 1968 「前田遺跡出土石器類」『岐阜県指定文化財調査報告書』11
70. 吉田富夫 1969 「御物石器用途新考」『古代文化論叢』財団法人古代学協会
71. 大参義一・安達厚三 1972 『岐阜県史』通史編原始
72. 岡本東三 1972 「奈良市発見の御物石器について」『考古学雑誌』58-2
73. 河本清・枝川陽・栗野克己 1972 「岡山県真庭郡落合町西原出土の線刻石製品」『考古学雑誌』58-2
74. 巽三郎 1972 「紀伊発見の御物石器」『考古学雑誌』58-2
75. 橋本正 1972 「縄文後・晩期」『富山県史考古編』
76. 四柳嘉章 1973 「晩期遺跡の立地と石器」『日本考古学協会昭和48年度大会発表要旨』
77. 橋本澄夫 1973 「野々市町御経塚遺跡』
78. 大参義一・巽淳一郎他 1974 『大和村の遺跡』大和村教育委員会
79. 小島一夫・巽淳一郎・高木洋・大槻伸 1974 『白鳥町の遺跡』白鳥町教育委員会
80. 寺村光晴・中島宏 1974 『細池遺跡』糸魚川市教育委員会
81. 高堀勝喜 1974 「今田の御物石器」『富来町史資料編』
82. 十日市町教育委員会 1974 『十日市町苗場山麓地域農業開発事業予定区域内分布調査(第1次)概要』
83. 荘川村 1975 『荘川村史』
84. 金山町 1975 『金山町誌』
85. 江坂輝弥 1975 「なぞの古代遺跡と遺物」『日本古代史の旅2. 縄文・弥生 日本のあけぼの』
86. 岩野見司・能登健 1975 『一宮市文化財調査報告2 馬見塚遺跡範囲確認調査報告付載馬見塚遺跡出土の御物石器・祭祀遺物』
87. 橋本正他 1975 『富山県朝日町柳田遺跡・柳田古墓緊急発掘調査概報』
88. 美並村 1976 『美並村の歴史』
89. 土田吉左衛門 1976 「家ノ下遺跡の石冠および御物石器について」『飛驒春秋』21-10
90. 橋本正 1976 「御物石器論」『大境』6
91. 清見村 1976 『清見村誌』

92. 岐阜県立博物館 1979 『濃飛の先史時代』特別展図録
93. 萩原町教育委員会 1980 『萩原の史跡と史話』はぎわら文庫 3
94. 下呂町 1980 『飛驒下呂』図録
95. 岐阜市教育委員会 1980 『岐阜市埋蔵文化財展』資料
96. 鈴木道之助 1981 『図録 石器の基礎知識Ⅲ 縄文』柏書房
97. 能登健 1981 「信仰にかかわる遺物(Ⅰ)」『神道考古学講座』第1巻 前神道期
98. 金沢市教育委員会 1981 『金沢市中屋遺跡』
99. 加藤三千雄 1982 「御物石器の概要」『能登町史』
100. 金子裕之 1982 「縄文時代Ⅲ(後期・晩期)」『日本の美術』191 至文堂
101. 名古屋市博物館 1982 『東海の縄文時代』特別展図録
102. 高堀勝喜 1983 『野々市町御経塚遺跡』野々市町教育委員会
103. 大江命・野村宗作・垣水富郎 1983 『巾通り遺跡』白川村教育委員会
104. 辻森由美子 1983 「石製品」『御経塚遺跡』
105. 渡辺誠 1983 「御物石器」『日本考古学小辞典』ニューサイエンス社
106. 佐藤とき子 1984 『大和村史』原始・古代第1章 大和村教育委員会
107. 金沢市教育委員会 1984 『チカモリ遺跡 石器編』
108. 林直樹 1984 「岐阜県宮川村金清神社遺跡」『月刊文化財出土情報 3月号』
109. 能登町 1984 『真脇遺跡発掘調査概報』
110. 小島俊彰 1985 『越中五箇山平村史』
111. 古川町笹ヶ洞区 1985 『笹ヶ洞沿革史・恵比須の里』
112. 加藤三千雄 1986 「御物石器の出土状況」『真脇遺跡』
113. 南久和 1986 『金沢市新保本町チカモリ遺跡』
114. 稲野裕介 1987 「呪物」『季刊考古学』21 雄山閣
115. 富山市考古資料館 1987 『栗山コレクション目録』
116. 寺村光晴・青木重孝・関雅之 1987 『史跡寺地遺跡』新潟県青海町
117. 河合村教育委員会 1987 『下田遺跡』
118. 西脇対名夫 1988 「御物石器」『考古資料図録』辰馬考古資料館
119. 石川県埋蔵文化財センター 1989 『金沢市米泉遺跡』
120. 垣水富郎 1990 「古川町中野出土の猿石について」『どっこいし』34
121. 大江命他 1990 『河合村史』通史編
122. 関西大学考古学等資料室 1990 『石器資料の石質調査』
123. 吉朝則富 1991 「御物石器研究の視点」『会報斐陀』創刊号
124. 早川正一・林直樹 1992 「岐阜県古城郡宮川村家ノ下遺跡」『日本考古学年報』45
125. 三重県埋蔵文化財センター 1992 『三重の縄文時代』
126. 長浜城歴史博物館 1992 『まじない・まつり・いのり 湖北の埋蔵文化財』
127. 林直樹 1992 「柱状節理利用の石棒製作址」『季刊考古学』41
128. 岐阜県文化財保護センター 1993 『荒城神社遺跡』
129. 名古屋市博物館 1993 『縄文から弥生へ』特別展図録
130. 吉朝則富 1993 「飛驒の刻文入石皿について」『会報斐陀』3
131. 吉朝則富 1993 「飛驒のおいねずみ型石冠とその類型について」『どっこいし』44 飛驒考古学会
132. 戸沢充則 1994 『縄文時代研究辞典』東京堂出版
133. 吉田英敏他 1994 『川合遺跡群』可児市教育委員会
134. 吉朝則富 1994 「飛驒の縄文後・晩期特殊石器群」『郷土研究岐阜』69
135. 石川県立歴史博物館 1995 『真脇遺跡と縄文文化』特別展図録
136. 神村透 1995 「考古学に見る飛驒と木曾の交流」『飛驒と考古学』
137. 丸山和雄 1995 「三種の神器 石冠・御物石器・どっこいしを取りまく諸問題」『飛驒と考古学』
138. 飛驒みやがわ考古民俗館 1996 『大昔のみやがわ』
139. 藤田富士夫 1996 「婦中の先史」『婦中町史』
140. 氷見市立博物館 1996 『図録 縄文人の祈り』
141. 朝日村教育委員会 1996 『ごうろう遺跡』
142. 増子誠 1996 「御物石器の基礎的研究」『筑波大学先史学・考古学研究』7
143. 藤本健三 1997 『丹生川村史』資料編Ⅰ
144. 沢田伊一郎 1997 「縄文文化における楽器についての試論(2)―石冠・御物石器に想定される楽器―」『どっこいし』54

145. 宮川村教育委員会 1997 『家ノ下遺跡発掘調査報告書』
146. 藤田富士夫 1998 『豊田大塚遺跡発掘調査報告書』
147. 仁科章 1998 「福井県における縄文時代の祭祀遺物資料集成(上)」『福井県立博物館紀要』7
148. 吉朝則富 1998 「古川町黒内の考古遺物」『どっこいし』57
149. 吉朝則富 1998 「山下コレクション見学記」『どっこいし』59
150. 宮川村教育委員会 1998 『宮ノ前遺跡』
151. 白川村 1998 『白川村史』上巻
152. 和良村教育委員会 1998 『和良村の文化財』3集
153. 吉朝則富 1999 「遺物研究 御物石器」『縄文時代』10
154. 宮川村教育委員会 2000 『宮ノ前遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
155. 上枝村史編纂委員会 2000 『上枝村史』
156. 岐阜県文化財保護センター 2000 『いんべ遺跡』
157. 沢田伊一郎 2003 「郡上郡和良村の石冠・御物石器」『どっこいし』72
158. 利賀村 2004 『利賀村史』
159. 橋詰佳治 2004 『岩村町歴史資料館考古図録』
160. 岐阜県文化財保護センター 2004 『岐阜県新発見考古速報』
161. 八尾町教育委員会 2005 『八尾町埋蔵文化財分布調査報告』Ⅵ
162. 沢田伊一郎 2005 「恵那市笠置町姫栗(堀田)遺跡と森腰遺跡」『どっこいし』78
163. 富山県埋蔵文化財センター 2006 『埋文とやま』96
164. 富山県埋蔵文化財センター 2006 『特別展図録 重文境 A 遺跡出土品のすべて』
165. 中日新聞社 2007 中日新聞 12月11日付記事
166. 吉朝則富 2007 「下呂市湯之島館所蔵の考古資料について」『どっこいし』86
167. 岩田勲 2007 「湖底遺跡調査報告その2」『どっこいし』86
168. 吉朝則富他 2007 『国府町史 考古・指定文化財編』
169. 富山市考古資料館 2008 『富山市考古資料館報』45
170. 沢田伊一郎 2008 「郡上市大和町竹継薬師堂保管の御物石器」『どっこいし』87
171. 沢田伊一郎 2009 「郡上市美並町の御物石器」『どっこいし』92
172. 富山市埋蔵文化財センター 2010 『越中と美濃を結ぶ考古展』記念講演録
173. 吉朝則富 2010 「未報告の御物石器2例」『どっこいし』95
174. 吉朝則富 2010 「古いねずみ石冠考」『同志社大学考古学研究会50周年記念論集』
175. 吉朝則富 2010 「かつをぶし形石器考」『光記念館研究紀要自然科学』平成20・21年度号 6号
176. 関西縄文文化研究会 2010 『縄文時代の精神文化』

(補稿)

177. 川口孫二郎 1934 『飛驒の白川村』
178. 下呂町 1954 『下呂町誌』
179. 渡辺賢雄 1967 『板取村の歴史』
180. 下呂町 1972 『下呂町上原誌』
181. 土田吉左工門 1982 「宮川村出土の御物石器」『飛驒春秋』27-8
182. 宮川村 1981 『宮川村誌』通史編上
183. 石原哲彌他 1985 『馬瀬村の埋蔵文化財』
184. 土田吉左工門 1987 『飛驒の神社』
185. 吉朝則富 1991 「高山市の縄文時代遺跡7、中切山ノ下・中切日焼遺跡」『飛驒春秋』369
186. 吉朝則富 2000 「御物石器の新例」『どっこいし』65
187. 吉朝則富 2009 「飛驒の独鈷石について」『斐太紀』平成20年度研究紀要



10



16



23



27



28



29



32



34



37



38

写真図版1 (縮尺不同)



39



41



42



43



44



47



48



54



55



58

写真図版2 (縮尺不同)



63



64



73



75



82



83



84



85



86

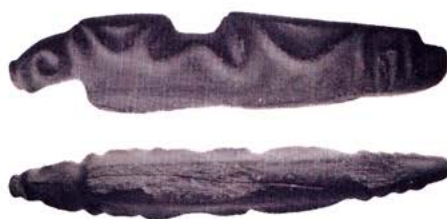


90

写真図版3 (縮尺不同)



92



93



95



96



97



102



105



107



110



114

写真図版4 (縮尺不同)

光記念館 研究紀要 自然科学 第7号

平成24年3月31日発行

編集・発行 光記念館

〒506-0051 岐阜県高山市中山町175

TEL 0577-34-6511

FAX 0577-34-6065

<http://www.h-am.jp>